



Title	予防概念の史的展開 : 中世・ルネサンス期のヨーロッパ社会と黒死病
Author(s)	河口, 明人; KAWAGUCHI, Akito
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 102, 15-53
Issue Date	2007-06-29
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.102.15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/26190
Type	departmental bulletin paper
File Information	102_15-53.pdf



予防概念の史的展開

—中世・ルネサンス期のヨーロッパ社会と黒死病—

河 口 明 人*

Historical Evolution on Concept of Prophylaxis:
European Society and Black Death in Medieval and Renaissance Era

Akito KAWAGUCHI

【目次】

1. 生態系の中の疫病と歴史
2. 生存の戦略としての予防
3. ヨーロッパ医学の系譜
4. イスラム医学
5. 十二世紀ルネサンスとキリスト教
6. イスラム思想と大学の危機
7. 黒死病の衝撃
8. ヨーロッパ社会の変動
9. ルネサンスの奈落
10. ルネサンスの双生児—個性と私性—
11. 黒死病の病因論と公衆衛生
12. ルネサンス期の医学と医師

注釈

1. 生態系の中の疫病と歴史

食物連鎖の頂点として、地球上に君臨してきた人類の歴史には敗北の陰がある。「人間は、当初の動物的状態から解放され、また他のもろもろの生物を支配して以来、それらの生物に対して《巨視的寄生》を実践してきた。しかし同時に、微生物・細菌・ウイルスなど、限りなく小さいもろもろの生体に攻撃されたり悩まされたりしながら、人間自身が《微視的寄生》の餌食となってきた…。」⁽¹⁾つまり人類は、自身の生存のために犠牲にした膨大な生物に見合うように、莫大な同類の犠牲を強いられてきたと言える。ペロポネソス戦争開始後の紀元前429年、アテネは疫病に襲われてペリクレスが死亡し、「この大疫はアテーナイ市全体の秩序が崩れていく魁さきがけとなった。」⁽²⁾飢饉と疫病は絡み合うように襲ってきた。バッタの襲来の後に広がったオロシウスの疫病（AD125）、帰還したローマ軍兵士たちから各地に伝播したアントニヌスの疫病（AD164-180）、その後のキプリアヌスの疫病（AD250-264）や

* 北海道大学大学院教育学研究院人間発達科学分野教授（健康科学）

40年も続いたユスティニアヌスの疫病（AD540-590）などが記録されている。これらの疫病は、地中海世界の人口を四分の三まで減少させたばかりでなく、確実に人間の歴史を修飾してきた。

キリスト教を弾圧しつづけたローマ帝国は、これらの疫病への治療や救済を求める人々へ避難場所を提供しつづけたキリスト教に遂に飲み込まれた。「ローマ帝国が不治の疫病によって荒廃されなかったなら、キリスト教が世界勢力としての基礎を固めることにたぶん成功しなかったであろう。」⁽³⁾ 医療を支配下においたキリスト教は、以後ローマの軍隊を尖兵としてヨーロッパ世界を席卷し、医学がキリスト教の呪縛から解放されるにはルネサンス期を待たなければならなかった。疫病で崩壊した社会も多い。スカンジナビアの探検家、赤毛のエリックによって作られたヴァイキングたちによるグリーンランドの植民地が、黒死病によって絶滅しなかったら、ヨーロッパ人から見るアメリカ大陸の“発見の歴史”は異なっていたに違いない。さらに文明の痕跡が示すように、16世紀にメキシコを中心とする南アメリカを、十字架を押し立てながら蹂躪したスペイン人は、天然痘、麻疹そしてチフスを、生態系の異なる大陸に持ち込んで莫大な原住民の命を奪っている。「ヨーロッパ人の征服を契機としてアメリカ大陸で大規模な生物学的崩壊が生じた。」⁽⁴⁾ 「1568年メキシコの人口はもはや300万人たらず、つまり、侵略以前の10分の1であった…。しかも1620年には160万人におちる。この破局は、ユーラシア大陸が14世紀に経験したものを上回っている。…このような大殺戮が、…極めて攻撃的なもうひとつの文化を前にして、いくつもの文明を消滅へと導いた…。」⁽⁵⁾

人間の寿命が半世紀に満たなかった中世ヨーロッパの人々は、主な死因であった感染症の病因や治療を知らず、ハンセン氏病⁽⁶⁾をはじめとした慢性的に経過する疾病は、限られた個人や集団の罪悪に対する神の裁断（devine wrath）に起因するものと考えていた。今日、キリスト教によって継承されている聖油の塗布（聖別）も、政治的なカリスマ性を高めるために、聖油を使う“Royal touch”によって、秘跡や病気からの回復を人々に期待させたフランク王によって始められたものである⁽⁷⁾。1347年10月のシシリー島メッシーナに始まり、全ヨーロッパ人口のおよそ30%の激減という人類史上に過酷な犠牲を強いた黒死病（plague）の圧倒的な流行の時代に、人々は黒死病が終焉するように祈りながら行進し、人間の生存に責任を持つべき教会がなすべきことをなしていないと非難した。非難されたアヴィニョンの教皇クレメンスVI世（在位1342-52）は、これら民衆の怒りの行進に対し神を冒瀆するものと逆に非難しながら、自分の周りに大規模な火を焚いて“汚れた空気”から自分を守ろうとしたと伝えられている。彼の「指にはめられたエメラルドの指輪は、とくに南とか東に向けられると、ペストの毒を無力にする」⁽⁸⁾はずだった。にも拘わらず、「9人の枢機卿と70人の高位聖職者が」犠牲になった⁽⁹⁾。この経験からおよそ200年ののち、賢明にも黒死病が動物による伝搬である考えた人々は、しかし犬や猫を殺戮することによって、かえってペスト菌を運ぶネズミの繁殖を容易にしたのである⁽¹⁰⁾。

敵が何であるか不明であった時代の状況は、人々の哀しい苛立ちと的はずれな行動や言説を記録している。その的はずれの行動様式が、しかし、現代と無縁であると断じることはできず、惨劇の脅威がなくなった訳でもない。地球上から天然痘を撲滅した私たちは、不要になった天然痘への予防接種を終了させたが、2001年の炭疽菌事件でその危険性が意識されたバイオテロリズムを持ち出すまでもなく、人類が地球上から根絶し克服したと考えている天

然痘などの病原に対して、甚大な犠牲者をだす可能性があるほどに無防備かつ脆弱になっていることを意味している⁽¹¹⁾。疫病の歴史は、微視的寄生を余儀なくされる人類もまた、確実に生態系の一部であることを知らしめ、かつての怖ろしいアメリカ大陸の経験は、今日の私たちにも同様の教訓を発しつづけている。AIDS (Acquired Immune Deficiency Syndrome) は人間に認知されてから数十年のうちに、世界ですでに7千万人以上の罹患者と2千万人近くの命を奪うことによって今日の地球を脅かし、高病原性鳥インフルエンザ(H5N1)やSARS (Severe Acute Respiratory Syndrome) も、人獣感染症の枠を越え、人から人への爆発的な流行への脅威を予感させながら、人間の予防の最前線を突破しようとするかのように、一進一退を繰り返しながら東南アジアを中心として死者をだしている。

2. 生存の戦略としての予防

1674年、オランダ・デルフトの商人レーウエンフック (Antony Van Leeuwenhoek; 1632 - 1723) が、ガラス玉を磨いて制作した顕微鏡で雨水を覗き、そこにうごめ 無数の極微動物を観察したとき、それは人類が宏大な細菌の世界を発見した瞬間であった。それ以降、人類が、病原体としての細菌を認識し、感染症の概念を打ち立て、抗生剤の発見と治療法の開発を通して、現在の克服に至る壮大なドラマの影には、それまでに失われた莫大な人命がある。今日癌に苦しむ人々と同様に、前世紀中判の抗生物質の到来を知ることもなく、「死に至る病」としての結核に斃れていった多くの人々の無念さは、画期的な発見や事象の前後の落差を通して、人命に対する進歩には、時代を問わず一刻の猶予もないことを教えている。しかし、レーウエンフックの発見した極微動物 (=細菌)⁽¹⁾ がすぐさま病気に結びついた訳ではなく、ましてや予防という概念にも繋がった訳ではない。肉眼で見ることさえできない、取るに足りない極微動物が、人間を殺す力があるなどと誰にも想像できなかった。それどころか、産業革命の進展とともに労働者の劣悪な居住環境が、発疹チフスやコレラの蔓延のために労働者やその家族の生命を危機に陥れ、公衆衛生の思想が一般化した19世紀の後半においてさえ、依然として「瘴氣説」⁽²⁾ が、種々の病気の原因として有力な医学的見解であったのである。

今日の人類にとって、予防という概念は生存のための中心的な課題である。かつて、若い娘を“輸出する”ことで生計をたてていたトルコのある村は、将来の売り物の少女の顔が天然痘による“あばた”で台無しになるのを防ぐために、ジェンナーより遙か以前に“種痘”を開発していた。未知なる脅威に祈るしかなかった人類は、“流行病”のいくつかは、罹患によって生き延びた人間の(免疫)抵抗力をたかめることに気づいたとき⁽³⁾、不意に訪れる病気を待つのではなく、自ら病原体を“ワクチン”として受け入れることによって、体内に防御網を敷くことを学んできた。これらの試みは、幸福な生活を希求する人間が創り出した“積極的な”戦略なのであり、疾病との闘いの歴史的過程で蓄積されてきた病気と社会に対する今日的な結論である。

異なる時代や社会において疾病像は変化する。「疾病予防」というとき、私たちは個人の発症予防を含意してはいるものの、それが個人の範疇で達成されるということの意味ではない。ある疾患を発症する人は限られているにせよ、発症の機序は人類にとって普遍的であり、特に感染症からの予防は集団的にしか達成されないという認識がある。1974年、我が

国で百日咳ワクチンの予防接種による死亡事故が起きたとき、母親たちは我が子への死亡事故を恐れてワクチンの強制接種を忌避した。旧厚生省も百日咳の予防接種を任意とした結果、逆に百日咳で死亡する乳幼児が急増し、予防接種によるリスクを上回った。このように、個人的行動が、社会的危機を招来するということはある。つまり、疾病予防とは、予防接種に起因する予見不可能な死亡例のように、私たちの個的な生命のリスクを掛けた人類の生存の戦略であるという社会的背景がある。この意味では、個的な生存が他者に依存するという認識は、文化的な意味合いばかりでなく、生物学的にも正しい。このような構造的な衛生思想の公共性の獲得は、社会の中で生き残るべき、いわば「生存的主権者」が一握りの権力者や階層ではなく、全ての人々にあるという歴史的に獲得されてきた普遍的な近代の政治思想の諸概念の成立にも依拠し、あるいはそれに貢献もしてきた。このことは、ビスマルクと文化闘争を闘ったウィルヒョウ（Rudolf Virchow：1821-1902）の言葉に端的に表現されている。「医学は社会科学であり…広義の人類学であって、その最大の務めは、生理学を土台にして社会を作り上げることである。」⁽⁴⁾

予防のための知識は医学と密接に関わるものではあっても、予防と医学は互いに手を携えて発展してきたものではない。歴史は、予防と医学がむしろ全くちがった動機と発展の様式をもっていることを示している。それらが同一の地平で、互いに連携しながら人間の社会に奉仕するようになるのは、19世紀を待たねばならない。感染症の原因となる細菌が次々と発見された19世紀後半から、人類は感染症との闘いに確実な橋頭堡を築いた。ワクチンの開発や真菌の細菌に対する攻撃のメカニズムを借りて、「抗生物質」なるものを手にした人類は、突然生命を奪う感染症の脅威を克服したかのように見える。ところが感染症に対する「一時的な」克服は、今日新たな課題を突きつけている。すなわち、どのような抗生物質も効かない多剤耐性の細菌の進化を促し、さらに前人未踏の地域開発によって、これまで知られていなかった強力な感染性をもつ病原体を新興感染症⁽⁵⁾として「発見」しつづけている。一方で、航空機の発達によるglobalizationは、遙か彼方の感染症が、今日にも我が国を汚染するという瞬間的とも言える伝播を可能にしている。突発的に急襲する感染症に対し、社会防衛の時間的余裕は殆どなく、地球上の輸送革命による時間の短縮と人間の生活圏の持続的拡大は、未知と既知とを問わず、人類を狙う病原菌に対する365日24時間の、間断なき危機管理と精緻な国際的監視体制を要求しているのである。

人間の生命に与^{くみ}してきた医学と疾病から派生した予防概念の発展過程の歴史的な変遷を理解することは、疾病とは何かという設問への回答であるばかりではなく、現在の私たちが獲得した生と死を介した健康に関する社会的概念の輪郭を彫刻することである。

3. ヨーロッパ医学の系譜

西ヨーロッパ社会におけるギリシャ科学・医学は、ローマ時代に痕跡を残して殆ど断絶していた。ビザンチン帝国（東ローマ帝国）においてはギリシャ文化が存続したが、「中世初期西欧のギリシャ語の痕跡は、…きれいになくなって」⁽¹⁾ しまっていた。「1100年の西ヨーロッパは…ローマの学問のばらばらの断片しかなかった。」⁽²⁾ 12世紀までは「西洋は、…ユークリッド幾何学の大家を知らない。アルキメデス…のことも知らない。プトレマイオス、…これも知らない。ヒポクラテスやガレノスのことも知らない。さらには有名なアリストテ

レスの著作のほとんどもしられていなかった」⁽³⁾のである。

ヒポクラテス（Hippocrates学派）を中心とするギリシャ医学は、ヘレニズム医学へと継承され、アレクサンドロス死後のペルガモンやアレクサンドリアで発達した。ここでは、ストア自然哲学を背景とした「理論学派」、デモクリトス（Demokritos: B.C. 460 - 70）やエピクロス（Epikouros: B.C. 341 - 270）の原子論的思想を背景とした「方法学派」、そして人体の解剖を積極的に行った「解剖学の父」とされるヘロフィルス（Herophilos: BC 355 - 280 頃）、および「生理学の父」とされるエラシストラトス（Erasistratus: BC 304 - 250 頃）らによって支えられた「解剖学派」の三派の潮流があった。ヘロフィルスは小アジアカルケドーンの出身で、ヒポクラテス学派が創立したコス島の医学校で学び、人体の系統的な解剖を行ったとされる。彼は、生物学者（動物学者）であったアリストテレスが、心臓こそ感性と知性の主座であり、生命の本源であると考えたのと異なり、中枢神経組織の解剖学的所見から、ヒポクラテス学派と同様に、脳こそ知性の主座であると主張していた。

ヘレニズム科学の知見は、ガレノス（Galenus: 129 - 200）の医学的集大成の中にもかなり取り入れられ、また活かされたが、ヘレニズム文化の中心でもあったアレクサンドリアがローマに併合されると、それまで行われていた囚人を主体とする人体の解剖は禁止された。アリストテレスのリュケイオンに倣い、プトレマイオス1世（BC 304 - 283）によって創設され、II世およびIII世の世代にも継続的に発展した学問の中心地ムセイオン（学問研究所）は、ローマの支配とともにその文化的、哲学的、科学的知識の中心地としての立場が揺らいでいく。211年帝位についたカラカラ帝（マルクス・アウレリウス・アントニヌス）は、215年アレクサンドリア滞在中に反乱に遭遇し、反乱の背後にこの地の知識人たちがいると考え、「帝国からのムセイオンの援助を打ち切り、その財産を没収し、…滞在していた外国人はすべて追放」⁽⁴⁾した。その後のローマ帝国のキリスト教国教化（331年）とともに、テオドシウス1世（在位 379 - 95）は、非キリスト教の礼拝所の破壊を公認し、その許可をえた総主教テオフィロス（在位 385 ~ 412）は、アレクサンドリアのセラベイオン図書館の何十万冊の書物を焼き払った（391年）⁽⁵⁾。古代オリンピックもBC 393年の第293回を最後に禁止された。キリスト教の拡大と異教徒狩りによって、ギリシャの文化的・科学的遺産の多くは窒息し、キリスト教化したローマ帝国がそれを伝承・発展させることはなく、したがってローマ世界には伝わらなかった。「古代科学の崩壊に関わったずっと強力な因子は、ローマ帝国統治者層の基質であった。ローマ人は根っからの実務家だった。…ローマ軍の編成には当然医療が不可欠だった。この任務の必要性は軍指導者もはっきり認識した。軍医務局が創られ、みごとに周到に編成された。」⁽⁶⁾しかしローマは、科学的な研究の必要性を認めなかったばかりか、医師を組織的に養成するための「医学校を何一つ建てなかった。ローマ帝国領内のどこにも、きちんとした解剖学や生理学の教育は見あたらなかった。」⁽⁷⁾つまり、広大な大帝國を建設し、都市建設とその生命線としての上下水道に関する公衆衛生的環境の構築に類い希なる能力を発揮したにも拘わらず⁽⁸⁾、ローマ人にとって医学は征服した異民族の学問であり、「ローマ民族は自らの中からは医学文化を全く創り出さなかった」⁽⁹⁾のである。

ギリシャ科学の世界への伝達とその貢献はイスラム文化にある。529年ビザンチン皇帝ユスティニアヌス1世（在位 527 - 65）もまた、キリスト教の脅威になるとして、かつてプラトンが創設し、900年の伝統を誇るギリシャ哲学・科学の中心的存在であったアカデミアを閉鎖した⁽¹⁰⁾。このとき、今日「ヨーロッパの伝統」として伝えられるギリシャ哲学・医学

は、学者たちとともに国境を越えてペルシャに向かったのである。さらにアレクサンドリアがイスラム世界の支配下に入った641年以降、ギリシャ医学はアラビア・イスラーム文化圏に受け継がれることとなった。

「それまで、多神教と偶像崇拜の巢窟であったあのアラビアに」⁽¹¹⁾ この世紀、突如として大帝国を建設したムスリムたちは、競い合うように「自分の費用でビザンチン帝国に使者を派遣し、…哲学、天文学、数学、医学の古書を探したのである。…彼らは高額を支払ってギリシャ人の諸著作を買い占め」た⁽¹²⁾。とくにアッバース革命ののちの7代目カリフ、アル＝マムーン（在位813－33）は、それまでの人間のいかなる意思的行動も神の予定した意思である、という人間の自由意志が否定された考えかたを一転し、「理性を真理の標準と認め、かつその絶対的権威を確立した」⁽¹³⁾ムータズィラ派をイスラム教解釈の教義として公認した。彼は、この教義に反対するものを悪名高いミフナ（異端審問）で弾圧する一方で、ギリシャやインドの科学・医学などイスラーム以外の学問にも真理探究の意義を見出した。そして「ビザンティン帝国の皇帝に書簡を送り、古代ギリシャの学問の写本を収集するための使節を派遣する許可を求め」⁽¹⁴⁾、830年翻訳研究機関「バイタル・ヒクマ智恵の館」を創設して膨大なギリシャ文献をアラビア語に翻訳させる一大国家事業を領導したと言われる。「中世イスラーム世界の各地で生まれた何千という科学書が、現在世界中の図書館に収められている。…近代科学が出現するまで、これほど多くの科学者が活躍し、これほど多くの科学書を生み出し、これほど多様で持続的な支援を科学活動に提供した文明は、ほかにはなかった。」⁽¹⁵⁾医学に限らずアラビア科学（天文学・数学・地理学・光学・錬金術・医学）がめざましい発展を見せた思想的背景は、その実践性と包括性、そしてその合理的精神にある。この時期、生活の隅々を律する厳しいイスラムの教え（コーラン、ハーデイス）に背く様々な合理主義的思想が公然と論じられた。もともとコーランには論理的矛盾が指摘され、各宗派・派閥は多様な独自の哲学的解釈に拠ったため、正統性の判断は政治的状況に依存していたといつてよい。多くの宗派が成立する背景には、イスラム世界の拡大が、単なる政治的支配権の拡大ではなく、各地方の伝統的文化との衝突と融合の過程であったことによる。「アラビア科学」とは「アラビア人の科学ということの意味しているのではない。…むしろ人種的にアラビア人である科学者・哲学者はあまり多くはなく…ほかはほとんどイラン人、ユダヤ人、トルコ人等」⁽¹⁶⁾であった。「古い伝統は、ムスリム世界の科学者の手で変えられていったが、それは…それまでの科学の範囲を拡大し、方法を変えることによって行われた。…宗教は、この変化のプロセスで直接的な役割を演じなかった。科学の知的内容をかたちづくることもなければ、科学の発達を妨害することもなかった。」⁽¹⁷⁾そればかりか、「科学に関する宗教的な講話の目的は、…科学を宗教に服従させることではなく、この二つを切り離すことだった。」⁽¹⁸⁾コーランに預言者として出現するキリストを尊敬するイスラム教徒の支配下において、「キリスト教徒やユダヤ教徒は、定額の租税を払うことができればイスラム教への改宗を強いられることはなかったし、おそるべき兵役の義務を課されることもなかった。」⁽¹⁹⁾むしろ「新たなイスラーム国家は、クルアーン（コーラン）の命ずるところにしたがって、ユダヤ人およびキリスト教徒の生命を保証し、全体としてみれば彼らを保護した。」⁽²⁰⁾ムスリムたちは、キリスト教徒への徴税による収入のために改宗を望まなかったとも言われる。当然のことながら、科学者たちもイスラム教徒ばかりではなかった。ウマイヤ朝のカリフたちはヘレニズム医学の訓練を受けた医師を雇い、アッバース朝のカリフたちも、キリストの神性を否定したためにエフェソス公

会議（431年）で異端とされ、東方への活路を見いだしたネストリウス派の医師たちを宮廷付きの医師として抱えた。「^{バイタル・ヒクマ}智恵の館」の翻訳集団を率いて、ギリシャの医学書や哲学書の多くをアラビア語に翻訳した医師フナイン・イブン・イスハーク（809 - 77）は、まさにネストリウス派のキリスト教徒だった。つまり、「アラビア科学を築き上げたひとびとは必ずしもイスラム教徒のみではなかった。」⁽²¹⁾ これらの膨大な資料の翻訳という蓄積の上に、バクダード、ボハラ、カズニ、カイロ、コルドバという多極性をもちながらアラビア・ルネサンス⁽²²⁾ともいべきアラビア科学・医学が開花する。「おおよそ200年を通じて、古代ギリシャの科学・哲学文献の翻訳に途方もない時間、労力、金が惜しみなくそそぎこまれた。」⁽²³⁾ しかし「翻訳活動は、アラビア科学が生まれた唯一の原因ではなく、アラビア科学誕生の一側面だった。」⁽²⁴⁾ そして「イスラーム科学文化の普遍性に寄与した最も重要な要因は、エリート層だけでなくイスラーム帝国内のすべての人の普遍的な共通語としてアラビア語が出現したことだった。」⁽²⁵⁾ ここではインドやギリシャの医学が比較検討され、ギリシャ医学の集大成であるガレノスの体液病理学⁽²⁶⁾が最終的にアラビア医学に統合されたのは9世紀であった。

4. イスラム医学

「病院はイスラーム社会の制度面の功績として最大のものだといってよい。9世紀から10世紀にかけて、アッバース朝の首都として建設されたバクダードに5つの病院が建てられ、そのほか各地の中心地にも病院が建設された。982年にブワイフ朝の統治下で設立されたアドゥーディー病院…ダマスカスのヌーリー病院やカイロのマンスーリー病院など…これらの施設は性別、宗教、年齢、社会階級や財産を問わず、医療を必要とするすべての人に開放された。囚人にも医療が提供され、辺鄙な村にも移動診療所が巡回した。」⁽¹⁾ ウマイヤ朝の首都ダマスカスやバクダードばかりでなく、イベリア半島のコルドバでも、多くの病院が建設され、しかも無料で治療が施された。病院の財政は寄付⁽²⁾やヨーロッパ人との戦闘による捕虜の身代金などで賄われていた。そこでは、ギリシャ人でローマ軍属外科医であったディオスコリデス（Dioscorides: 40 - 90）が残した「薬学集成（マテリアメディカ）」の翻訳を基盤とし、さらにインド薬学を継承して発展した豊穡なアラビア医薬が活躍していた。「軍隊の衛生制度を含む全薬局制度は、9世紀のアル＝マムーンの時以来、国家の監督の下におかれていた。」⁽³⁾ ヨーロッパに病院と名の付く施設が一つもなかった10世紀ころ、コルドバだけでも50の病院をもっていた。⁽⁴⁾ 大きな病院は医師の養成機関を兼ね、医者を目指す若者はここで訓練を受けたのである。「大病院は同時に医科大学でもあった。ヒポクラテスやガレノスが教えたことや、アラビア人の偉大な医学者たちが教えたことを、初心の医師たちは、モスクの渡り廊下での公開講義で、あるいは医師たちによって指導された私的な学校で、とりわけ病院の大きな病棟や講堂で聴いた。」⁽⁵⁾

金髪のスキタイ人であり、30歳を過ぎてから医学を学び、しかも最も偉大な臨床家であり哲学者でもあったアッ＝ラージー（850 - 925）は、「天然痘とはしかの診断と治療法、および症状の違いをくわしく説明し」⁽⁶⁾、ヒポクラテス以来の医学を集大成した30巻におよぶ百科全書的な著作「医学の貯蔵箱」ばかりでなく、一般人向けの医学書「マンスーリーの書」を残した。彼は、先鋭なプラトン主義者でもあり、すべての啓示宗教を否定し、「はっきり

とアリストテレスを批判し、…『コーランよりエウクレイデス（ユークリッド）やプトレマイオスの著作の方がはるかに人類にとって有益である』と大胆に言いきった。」⁽⁷⁾ 彼が死んだ年に生まれたアリー・イブン・アッパース＝マジューシー（925-94）は「キターブ・アル＝マラキー（王の書）」（もしくは「医術に関する完全な書」）を書き、コルドバでは、ザフラーウィー（936-1013）が「キターブ・アッ＝タスリーフ・リ・マン・アジサ・アン・ターリス（医術を行う人のための手引き）」という30巻に上る医学的知識の集大成である医学百科事典を書いている。

その後が続くのが、以後のヨーロッパに大きな思想的・理論的影響を残し、永きにわたってヨーロッパ医学の教科書であり続けたイブン＝スィーナ（アヴィセンナ 980-1037）の「^{カノン}医学典範」である。「二百四十二に及ぶ著作を著し、しかも講義や医療実践にいそしむかたわら、宮廷の宰相として活躍した」⁽⁸⁾ イブン＝スィーナは、それまでのアラビア科学者と同様に、数学、天文学、化学、動植物学、物理学など今日では細分化された広範な科学に通じた人であった。医学典範は、包括的な体系と理論を有し、それまで行われていた経験的、個別的知識や口承による民間療法の複合物としての、キリスト教精神による患者の介護を旨とした修道院医学を遙かに凌駕していた。彼は「医学典範」の中で医学を定義する。「医学とは一つの学問であり、…その目的は健康なときはそれを保つことであり、失われつつあるときはそれを取り戻すことである。…理論的部門というときは、それはただ修得したとしても教義として役立つものに過ぎず、処方^{レセプス}を解き明かすことに繋がるのではない。…実践部門というとき、…それを学ぶことが一つの所見を生む助けとなり、この所見こそ処方の解明に繋がるものなのである。」⁽⁹⁾ 医学典範は、ギリシャ・ヘレニズム医学の集大成とも言え、疾病に関する体液病理学に基づく病因論から各種臓器の解剖・機能に至るまで広範に渡っており、かつ図譜も今日から見ても極めて精緻である。殆ど今日の医学教育の体系序列と同様に、骨格系、筋肉系、神経性、血管系などが網羅されており、医学典範が「いかに包括的であるかを知ると同時に、如何に多くの反医学的、非医学的事象が捨象されたかを納得する」⁽¹⁰⁾。

アッ＝ラジイーが死んで6年後の931年に、「バクダードのある医者が医学上の過ちを犯し、その結果患者を死に至らしめたということを知った」⁽¹¹⁾ カリフ、アル＝ムクタディル（在位 908-32）は、「政府に仕えている医師は例外として、すべての医師が試験をうけ、開業証明書によって認可されるべきことを命じた。」⁽¹²⁾ かくしてアラビア世界においては医師の「試験」が導入され、医師は認可されなければ医業を営むことは出来なかった（ただし組織的な免許制度にはならなかった）。一定の理論的水準や、高潔な医学的倫理性などが、ヒポクラテスやガレノスの影響によって「病院や専門学校、マドラサ（神学校）、モスクあるいは医師の家庭での教育を通じて伝えられた」のである⁽¹³⁾。アラビアの「多くの医師の生涯は、圧倒的に実用的な科学分野としての医学の育成に捧げられていた…。」⁽¹⁴⁾

クレルモン公会議（1095年）でのウルバヌス2世の唱道で開始された十字軍の遠征において、当地で傷ついた騎士たちは、十字軍付添いの医師よりも、敵側のサラセン軍の医師に診てもらおうことを望んだという。治療法は、はっきりと異なっていた。怪我の跡に感染して化膿した状態は、ヨーロッパではヒポクラテス以来望ましい治療過程として温存され、往々にして敗血症を誘発することで生命を危機に陥れたが、アラビア医学では、イブン＝スィーナ（アヴィセンナ）によって「化膿なき治療」が実践されており、排膿することによって早期に治療した。「彼の成功は奇跡に近かった。以前は、傷が幸いにも癒痕^{はんこん}を残してなおるまで、燃

え刺すような痛みが何週間も、それどころか何ヶ月もかかったのに、今やほとんど一晩のうちに治ってしまったのだ。」⁽¹⁵⁾ 重傷者の手足の外科的切断のときには、「ハシーシュやヒヨスやマンドラゴラにひたした海綿で眠らせ、非人間的な痛みを感じないように」⁽¹⁶⁾ な麻酔の方法を発達させ、強い葡萄酒による湿布によって化膿を防ぐ消毒法を実施していたのである。しかしカトリック教会は、知覚を麻痺させる薬物を「悪魔の道具」として使用を禁じていた。そのためヨーロッパ世界での四肢切断は、力づくでそのまま剣を振り下ろす、おぞましいまでの野蛮な治療であり、その苦痛、出血とさらなる外傷で、多くが致命的だったという⁽¹⁷⁾。このようにして、ヨーロッパのラテン・カトリック文化とアラビア・サラセン文化との「境界線は、冷静な判断能力と迷信との間に…さらに正確には、解明されたアラビア文化と、精神的に後進的なままのキリスト教徒の間に引きさかれていた」⁽¹⁸⁾ ののである。

イスラム世界に対する防衛と、「危機に瀕した兄弟たちに対する救済義務を実行」⁽¹⁹⁾ した十字軍は、イスラム教をほとんど理解していなかったし、アラビア文化を移入する力ともならなかった。しかし契約のために従軍を余儀なくされたロンバルディアの医師フーゴ(Ugoda Luca: ? - 1258) は、「1221年に故郷に帰ってきたとき、…自分の十字軍の経験を、なおほとんど30年におよぶ活動を通して、…ボローニャの病人のために役にたつた。」⁽²⁰⁾ 外科学が、1163年の「教会決議によって医学校から閉め出され」⁽²¹⁾・軽蔑すべき医療行為であった西ヨーロッパにおいて、異教徒から化膿なき治療や麻酔の技術を含めた実践的外科学とその有効性を学んだフーゴは、70歳を越える年齢にむち打つように、「ボローニャに、…自己流に発展させた外科医学校を残した」⁽²²⁾ ののである。

5. 十二世紀ルネサンスとキリスト教

12世紀以前、アラビア文化とヨーロッパとの主要な接点は四つあった。それはビザンチン帝国、シチリアを含む南イタリア、東方貿易で交流のあった北イタリア、そしてイベリヤ半島(スペイン)である。カロリング王朝の勢力が衰退した10世紀初頭から、チュニジアのイスラム勢力(アグラブ朝)は、シチリアやイタリア南部に侵入し、902年から1091年まではシチリアは完全にサラセン人のものとなっていた。⁽¹⁾ 「10世紀にはサレルノは病氣治療の中心地になっており、11世紀には医学校がすでに確固たる地位を占めていた。」⁽²⁾ シチリアも南イタリアも、その後傭兵としてこの地に来たノルマン人が支配することとなるが、両シチリア「王国では、哲学から自然科学にいたる重要なギリシャ語、アラビア語の書物がラテン語に翻訳され、ビザンツの工芸や建築に関する知識がこの王国を経由してヨーロッパにもたらされ、また多くのサラセン人が住んでいた。そして11～12世紀のシチリアは、ノルマン王朝⁽³⁾ のもつて、西欧が東方ビザンツ文化およびイスラム文化を輸入するための窓口の役割」⁽⁴⁾ を果たしていた。シチリア王国には多くの有能なアラビア人が高級官僚として働き、また多くのイスラム教徒が、ある区画を築いて居住した。彼らは、キリスト教への改宗を強制されなかったし、幾人かの医師は、ダマスクスやコルドバで発達していた医学校の内容を、アマルフィー海岸に隣接した細長い街サレルノに伝えたと推定される。「アラビア人の諸著作を大いに活用しなかったような医師は、サレルノには一人もいなかった。」⁽⁵⁾ アラビア医学は、この南イタリアにおいて、カルタゴ出身でベネディクト修道会士でもあったコンスタンティヌス・アフリカヌス(? - 1087)が持ち込んだアラビアの医学書のラテン語への翻訳

を通して、一層促進されることとなった。彼は、モンテカッシーノ修道院において、アラビア医学の「翻訳物」にあたかも自分の著作であるかのように自分の名前を冠して、次々とラテン語の医学書を著した。

しかし南イタリア以上にアラビア文化の西欧への移入に重要な経路となったのはイベリア半島だった。イベリア半島はウマイヤ朝に率いられたベルベル人によってすでに711年からムスリムの支配下にあったが⁽⁶⁾、この半島には、750年アッバース革命によって根絶やしにされたウマイヤ家の生き残りであるアブド・アッラフマーン（1世）が、母の故郷の北アフリカを抜けて落ち延びてイベリアに達し、政治的争乱に乗じて756年、後ウマイヤ朝の覇権を確立した。その後のカリフ、ハカム2世（在位961－76）は、アッバース朝の科学や哲学文献の収集を命じ、バクダードと比肩するまでになったコルドバでは「11万3000の住宅、6000のモスク、300の浴場、50の病院、80の公立学校、17の大学と高等学校、何十万冊もの書物を成していた200の公共図書館」⁽⁷⁾があり、「コルドバの図書館の蔵書目録だけで44巻、それらには約60万巻の書物に関する書誌情報が含まれ」ていた。⁽⁸⁾しかし、この華麗なアンダルス文化も、やがてイスラーム教徒の内紛による争乱の時代（フィトナ）に突入して小都市が群雄割拠する状態となり、イベリア北方のキリスト教国レオンとカスティラが合併（1037年）して勢力を増し、ローマ教皇によって国土回復（リコンキスタ）運動が奨励されると、1085年トレド王国が、そして1118年サラゴサ王国がキリスト教徒の支配下に入ることとなる。このトレドに、その後続々とヨーロッパの知的好奇心に燃える人たちが流入してきた。そこで彼らは、ラテン世界に知られていなかった諸々の著作に出会うことにある。アラビア書物のラテン語への翻訳において、とくにバース（イギリス）出身のアデアード、クレモナ（イタリア）出身のゲラルド（ゥス）の果たした役割は大きかったと言われている。ラテン語の世界にはなかったプトレマイオスの「アルマゲスト」⁽⁹⁾を持って来るようフリードリッヒ（1世）赤髭王（在位1155－90）から命令されてトレドにやってきたゲラルドは、「アラビアの知識のこのかつての牙城に山積していた宝に魅せられて、…殆ど20年もその地にとどまった。」⁽¹⁰⁾「彼のアルマゲストの翻訳は1175年の日付になっている。…いちばん多いのは、ガレノス、ヒポクラテス、そのほかの医学書で、…アラビア科学全体としては、クレモナのゲラルドゥスの手を通じて西ヨーロッパにはいったものが何よりも多いのである。」⁽¹¹⁾やがてイベリアのアラビア文化園とヨーロッパの接点であった南フランスのモンペリエにも医学校が出来た。この当時、ラテン・カトリック文化のヨーロッパで最も重要な大学が、サレルノ医学校（南イタリア）とモンペリエ大学（南フランス）であったことは、ヨーロッパ医学の系譜が、アラビア文化の豊饒な医学・科学の移入と受容に基づいていたことを示すものである。

12世紀に開始されるヨーロッパ世界へのアラビア文化の雪崩のような移入と知的爆発は、今日「12世紀ルネサンス」と呼ばれているが、これに呼応するかのように、ヨーロッパには司教座聖堂付属の学校や都市を基盤として自然発生的に、あるいは教皇や王立のものを含め、陸続として大学が創設されていく⁽¹²⁾。大学の成立は、効率的な情報伝達という意味以上に、新しい課題の抽出や考察の深化という知的労働の高度化をもたらした。

「12世紀は、3学芸と4学芸を新論理学、新数学、新天文学で充実させるとともに、法学、医学、それに神学という専門の学部を生み出した。それまで大学は存在しなかった。存在してもおかしくないだけの学問が西ヨーロッパになかったからである。…大学は文明に対して

中世がなしとげた大きな貢献，はっきりいえば12世紀の貢献である」⁽¹³⁾ イタリアにおいては，自治権を有する都市の成長とともに，互いに優位性を争った神聖ローマ皇帝，教皇さらには都市政府の様々な特権的庇護のもとに，ボローニャ，パドヴァ，シエナ，ペルージャなどの多くの都市に，学生団体によるギルド的な大学が自立するようになった。「第一の波が，サレルノを世界的名声にまで押し上げた後に，第二の波は，スペインからヨーロッパの水門であるモンペリエを脈々たる生命へと目ざませ，ボローニャの外科医学校と大学に力強い推進力を与え，渴望され，模範的と認められていた教材を，パドヴァへ，パリへ，オックスフォードへと伝えた。」⁽¹⁴⁾ これによって，医学は大学における独立した学科として認知されるようになった。

12世紀ルネサンスが西欧につたえたものは，文学や芸術というよりも哲学や科学（数学・天文学・占星術・錬金術・医学）に重心を置いた情報であった。大学の存在は，都市の富と文化的地位の象徴となっていくため，各都市政府は大学に種々の法的特権を認め，教皇も大学の自治と自主権を確認していた。したがってとくにイタリアの大学は「教会にはなく，都市の管理に服していた。」⁽¹⁵⁾ 各都市政府は著明な教授を高給で配置することで学生を集めた。学生の乱暴や狼藉による市民との争いが顕在化したときでさえ，大学は教皇の庇護を求め，また都市政府と大学集団が対立したとき，大学は都市からの集団「退去」を斃して世俗政府を威嚇した。パドヴァ大学やケンブリッジ大学は，それぞれボローニャ大学やオックスフォード大学の学生・教師が，町の政府と対立し，集団で移動したことによって生じた新たな大学だった⁽¹⁶⁾。学生や教師はこの大学で，ギルドおよび徒弟制度的な環境のなかで自由七学科とともに，とくにボローニャで復活したローマ法典を基盤にした法学，パリ大学を頂点とする神学，そして自然哲学に関する医学を発展させ，部分的には医師の集団を形成していった。ここで伝授されていたものは，医学を目指す場合でも，医学のみでなく，論理学，哲学，天文学などの広範な教養を含んでいた。この時期において人間学を統括するものは神学であり，一方「科学」を統括するものは医学であり，当時の医師たちはアラビアの医師たちと同様に，おしなべて自然哲学（＝科学）の教育を受けていたのである。かれらは自分を「医師」としてというよりは「哲学者」として自認していた。すなわち「医学者はまず哲学者でなければなら」⁽¹⁷⁾ず，「医学は第二の哲学であり，その職業に万全を期す医者は7自由学芸に通じていなければ」⁽¹⁸⁾ならなかった。なぜなら「医師は読んだものを理解し説明できるように文法の心得があることが求められ，修辞学も，治療する病気を道筋正しく述べることができるために，…そして数学も，発作が起こっている時間，症状の経過日数を知るために，…幾何学も地域の特性や位置関係を知るために，…音楽も…音の調べによって邪な霊から救う（ために）…，星に運行や季節の変わり目を知るために天文学も知らなければならない。…医学が『第二の哲学』と呼ばれるのはこのようなわけからで，両者（＝哲学・医学）とも十全の人間を求める。一方は霊を癒し，一方は肉体をいやす」⁽¹⁹⁾とされたからである。

しかし，ヨーロッパの知的爆発は，大学に大きな危機をもたらした。その最大のものは，大学の自由と自主権を認めつつも，カトリック神学思想教育の機能を賦与し，大学を教会の中央集権配下に置こうとする教皇と，大学人の中に醸成されていた自治原理と連帯意識との対立であり，その確執は，アラビア文化を介したギリシャ科学のヨーロッパへの怒濤のような移入によって知られるようになったアリストテレスの自然哲学に含まれていた反神学的要素に対する哲学的葛藤によって顕在化した。アリストテレスの諸著作とその体系性は，ヨー

ロッパに大きな衝撃を与えた。アリストテレスが圧倒的な勢いで受け入れられたのは、自然学に立脚した内的整合性と幅の広い一貫した世界体系にある。しかし、キリスト教徒ではなかったアリストテレスの哲学は、当然のことながらキリスト教神学と必ずしも一致するものではなかったし、その自然哲学はアラビア哲学者・科学者の注釈によって拡大されていたからである。

6. イスラム思想と大学の危機

「中世西欧のスコラ学と異なって、イスラーム世界では、哲学と神学は明白に異なる学問だった。」⁽¹⁾ ヨーロッパの人々は、はじめはイブン＝シーナの解釈によるプラトン主義的アリストテレスに遭遇した。「アリストテレスの哲学がイスラームの哲学となるためには、至高最善の絶対者を存在の源としてそこから最下物質界の形成に及ぶ整然たる段階的宇宙観にまで作りなおさなければならなかった」⁽²⁾ ために、イスラム社会に移入されたアリストテレス哲学は、多分に新プラトン主義的傾向を帯びていたからである。彼は「啓示と調和する独立した真理をもたらしうるとして科学的思考の可能性を強力に主張した。」⁽³⁾ 換言すれば、アラビア科学や哲学は、ギリシャ文化をイスラム信仰と一致する形でいわば創造的に継承したのであり、西欧においてキリストの偶像化やその文化に親しんできたキリスト教徒にとって、「異教徒」としての匂いが様々な形で埋め込まれていたのである。その後にアンダルシア（イベリア）から「アリストテレスと一緒にやってきたのはアヴェロエス（イブン＝ルシュド）」⁽⁴⁾ であった。ムワヒッド朝の大裁判官であり、宮廷医師でもあり、また最大のアリストテレス注釈者であるイブン＝ルシュド（1126-98）は、世界解釈の最高権威を神学者ではなく哲学者におき、アレクサンドリア的要素（新プラトン主義的）要素を混在させていたイブン＝シーナのアリストテレス的理解を排して、本来のアリストテレス理解を基盤にした創造的で合理的な形而上学を展開したため、イスラーム正統派からの告発を受け、著作は禁書となり、後のイスラム世界も彼の思想を受け入れられることはなかった。しかし、「人間の知性は個人的肉体の死後、全人類に共通な普遍的知性のうちに消融して永遠に存続する」⁽⁵⁾ という知性単一説、さらには神は永遠であるために、世界も永遠であり、世界に始まりを設定することは神を時間で制限することであるとする世界永遠説（神による天地創造説の否定）などは、ヨーロッパの人々に驚愕をもって受け止められた。彼が説く「信仰が真理に到達する唯一の方法であるといった観念に対する論駁の書は、アラブの伝統の内部の4世紀の長きにわたって継承されてきたアリストテレスの遺産を大いに反映するものであった」⁽⁶⁾ ばかりか、イブン＝ルシュドはアリストテレスの哲学・自然学における要素をさらに進展させる一方、「人間的自由の擁護と呼ぶような基本的ヴィジョンを」⁽⁷⁾・すなわち「信仰と理性がそれぞれの分野でともに羽ばたくためには、むしろ抱擁しなければならないというパラドクス」⁽⁸⁾ を主張していたのである。ヨーロッパはイブン＝ルシュドが解決しようとした問題意識、すなわちアイデンティティとしての宗教的非合理的精神と哲学的思索がもたらす合理主義的精神の相剋の根本的な和解を目指した問題意識に触発されながら、アリストテレスの（自然）哲学を理解しようとしていた。しかしイスラム文化を媒介としたアリストテレスの著作が西欧に広がるにつれ、「スコラ哲学者たちはすぐさま、外で待ち受けている反論はいうまでもなく、アリストテレス主義の伝統の内部にも対立と矛盾があることに気付いた。」⁽⁹⁾ 哲学と

神学の領域が明確でなかったこの時代、教会は「アリストテレス哲学に武装されたアラブ＝イスラーム思想によってキリスト教の世界観の根底を揺さぶる大きな精神的・文化的危機に直面し」⁽¹⁰⁾、自己のアイデンティティを掛けて、知識人たちを制御しはじめた。中世後期のこの時期に、パリ大学、とりわけ神学部は、教皇や皇帝の権威に期するものとなっていたが、「1210年新着のアリストテレスの自然哲学書ならびにその注釈は、パリの管区教会会議で禁止された。1215年とくに形而上学にその禁止が確認され、適用された。」⁽¹¹⁾ その理由は、イブン＝ルシュドにおける個人の復活や奇蹟は無いとする説、あるいは世界には始まりはないとする世界永遠説などが、キリスト教哲学と相容れないというものであった。

1215年の第四回ラテラノ公会議は教会の権力の精神世界への絶対性を確立するために、宗教裁判所（異端審問所）の設置ばかりでなく、「14歳以上のすべてのキリスト教徒への年に一度の耳聴告白の実践を制度化」⁽¹²⁾し、個々人の「良心を点検」することによって、「世俗の者たちの日常および精神生活を一変」⁽¹³⁾させた。これらの教会の中央集権的支配が個人の日常および精神生活に拡大・浸透していく一方、「科学というものが、医学も同様、…ただ信仰の目的という従属的な役割を果たすことが許され」⁽¹⁴⁾るにすぎなくなっていった。インノセント3世（1198-1216）は「医者が、前もって懺悔を済ませていない患者を診ることは、教会から破門される」⁽¹⁵⁾と言い、外科手術などの司祭が避けるべき行動指針を示して医療に干渉した。カトリック信仰にあっては、「身体のために心配することよりさらに重要なのは、魂の救いを得ること」⁽¹⁶⁾であり、医学は原罪をもつ人間の地上における姑息的な助けに過ぎなかった。シトー修道院長のベルナルは、修道僧が病気になるときでも、「地上の助けを用いることによって彼らの魂の救いを危うくすることは相応しくない」⁽¹⁷⁾という理由で、懺悔なしに「医者と呼んだり、医薬品を用いることを断固として禁じた」⁽¹⁸⁾のである。

教皇グレゴリウス9世（在位1227-41）は教会の中央集権化をさらに押し進め、1227年にはドミニコ会に教皇直属の異端審問所が開設され、「頑固な異端者に対する罰が火刑と定められた。…異端者は一種の無政府主義者、社会の根幹を危うくする反社会的人間と見なされ」⁽¹⁹⁾たのである。しかし「1230年ごろにもなると、ローマ教皇がくり返し禁令を発してもほとんど効果がないことが誰の目にも明かになっていた。パリは、アリストテレス思想やアヴェロエスの刺激的なまなざしを公の場で教える優れた人びとでいっぱいになりつつあった。」⁽²⁰⁾ 自然哲学と神学との相剋に危機感を強めたグレゴリウス9世は、アリストテレスの自然哲学が大学での講義に使用できるように改変することを求めながら、1231年、「特別委員会がこれらの著作の誤りをすべて削除するまで、研究することを禁止した。」⁽²¹⁾ それまでにパリ大学神学部に2つの教授枠を獲得していたドミニコ会のアベルトゥス・マグヌス（1200-1280）や彼の弟子のトマス・アクィナス（1225-74）は、この思想の地殻変動期にあって、自然学思想のなかったキリスト教に、観察や実験研究を正当な学問として位置づけながら、アリストテレスのアラビア的（アヴェロエス的）解釈を超克するべく、アリストテレス哲学をキリスト教神学に合致するように精力的に努力した。換言すれば、イブン＝ルシュドが超克しようとした課題を解決しようとするように、しかし同時に彼に論駁する形で、自然科学的理解が、キリスト教神学に連結しうる哲学的方途を提供しようとしたのである。それは異端と断罪されるリスクを背負った危険極まりない試みではあったが、一方で「パリ大学（学芸学部：引用者）は、1255年にアリストテレス支持を宣言し、」⁽²²⁾ 「新アリストテレスの

全作品がパリ大学学芸修士の科目に指定された。」⁽²³⁾しかし、パリ大学内部では、自然哲学研究を推進した学芸学部と教皇の意図を顕現した神学部との対立、あるいは神学部の中でも、大学の構成原理に従わない托鉢修道士⁽²⁴⁾とかれらの地域での活動を忌避していた在俗修道士との争いや、托鉢修道会であってもラテン・アヴェロエス派を支持したフランシスコ会とそれを超克しようとしたドミニコ会との相剋など、教皇や世俗君主の大学への主導権争いを絡ませながら、複雑な様相を呈していた。「神学部に比べれば…(学芸)学部は、はるかに世俗的で、教会との結びつきもはるかに少ない環境であり、いやおうなく神学者や特に托鉢修道会の心を捉えていた正統・非正統の問題すなわち護教的配慮のなかった環境であった。」

⁽²⁵⁾学芸学部の学者のなかには、「…神の奇跡と考えなければならないものは何もない。なぜなら、我々は『自然なものを自然に取り扱っている』からである」⁽²⁶⁾と言い切るもの(スイジェ)もいた。これらラテン・アヴェロエス主義者(シゲルス、スイジェら)の研究に付随していた反キリスト神学的理論に危機感をもっていた新教皇ヨハネス21世(1276-77)は、1277年にパリ司教エティエンヌ・タンピエ(?-1279)にパリの状況報告を要請し、それに応えるようにタンピエは、「あらためて219の命題をあげてラテン・アヴェロエス主義を糾弾し、違反者は破門・追放にすると宣言」⁽²⁷⁾した。その結果として、パリ大学からアヴェロエスを支持する学者(シゲルス)は放逐され、「ローマに召喚されたスイジェは宗教裁判によって有罪とされ、数年後に獄死し」⁽²⁸⁾・サンフランシスコ会士であったロジャー・ベーコン(Roger Bacon: 1220-92)も、1277年から死の2年前までの13年間に亘る年月を牢獄で生きねばならなかった。教条主義的神学の科学的精神に対する勝利を意味したという点で、「1277年の否認(禁令)は中世大学の歴史上重要な事件」⁽²⁹⁾であった。多くの教皇を輩出したパリ大学神学部は、以後、中央集権的キリスト教神学の頂点として君臨していくことになる。

これらの過程は、異教徒としてのイスラム教の排斥は自明とし、さらにヨーロッパ内部の異端者やカタリ派⁽³⁰⁾などの異端派閥の肅正、あるいは引き続くフスなどの宗教改革の動きと絡みながら、中世から近代にむかうヨーロッパの科学・哲学・宗教の葛藤と政治的緊張関係の特徴づけることになる。「中世後期にもろもろの論争においては、大学、それもパリ大学の神学部の判断が、ほとんど決定的な意味を持っていたため、14世紀の人々の目にはパリ大学は皇帝と教皇に並ぶ権威を誇るものと写っていた。」⁽³¹⁾しかしやがて大学は、教皇権と対立し始めた絶対主義国家の君主との争いに翻弄されることになる。絶対主義官僚体制は、大学出身の知識人を必要としたため、とくにフランスのフィリップ4世は、それまで教会に任せていたパリ大学の機能的管理を世俗権力の支配下におこうとした。「1303年にフィリップ4世美王はパリの教授たちに向かって、ボニファティウス8世に対する請願書への署名を強要し、そのために、教皇に忠実なフランシスコ会の教授たち、なかでもドゥンス・スコトゥスはパリ大学を離れ、フランスの地を離れることを余儀なくされた。ドイツ皇帝に対する闘争に際してもフランス国王は、ドイツ人学生のパリ大学からの撤退を強いるような同様の暴政行った。」⁽³²⁾

12世紀ルネサンスは、主に机上の考察に終始し、アラビア科学が育んだ実践性やその科学的方法を学ばなかったという限界性はあるものの、のちのイタリアルネサンスに負けるとも劣らない、むしろそれ以上にヨーロッパ・キリスト教社会における転換点となった。知的爆発の引き金を引いたシチリア王国は、やがて異教徒文化としてのムスリムを南イタリアに強制移住させ、文化的交流を遮断するに及んで、世界を領導した華々しい先進文化の舞台から

消えていくことになる。イベリア半島ではもっと悲劇的だった。ムスリムたちが内紛によって自滅していく中で、1492年コルドバ陥落後のスペイン・カトリシズムによる「宗教的熱狂主義の大波が一切をのみこんでしまった。」⁽³³⁾ キリスト教徒支配下にイスラム教徒は、改宗か移住か死を選ばねばならなかった。イスラムの信仰、言葉、単語、歌、楽器、衣装、浴場など生活の隅々にいたるアラビアの慣習を体現するものは、「ガレー船に送られ、牢獄に入れられ、追放され、それのみか火刑にされる罰をうけた。…(キリスト教徒たちは=引用者)百万五千冊の書物を焼却したことに勝ちどきをあげた一八百年におよぶ精神的創造の果実が、無意味にも憎悪の犠牲にされたのである。」⁽³⁴⁾ ナチス政権確立とともに多くの学者がアメリカに流出した現代の歴史に対比するまでもなく、情報交換を遮断するいかなる社会にも将来がないことは歴史の教訓である。しかし、歴史の教訓は常に無視され、歴史が繰り返すこともまた歴史の皮肉である。ともあれ「ノルマンとホエンシュタウフェンの数世紀のあのシチリアにおいて、近代ヨーロッパが誕生したのであり、アラビア精神がその産科医であった。」⁽³⁵⁾ それにも拘わらず、ラテン・カトリック文化の歴史家たちは、シチリアとイベリアで開花しヨーロッパに伝えられたアラビア文化の遺産を封印した。フンケは文化的情報伝達の歴史的歪曲を指弾する。アラビア文化の貢献に盲目であるヨーロッパ人の責任は、「何百年もの間宗教的偏見に導かれてアラビア像を歪め、かれらの高い文化的業績の品位を貶め黙過してきた歴史的記述にある」⁽³⁶⁾ と。

7. 黒死病の衝撃

黒死病は、十字軍がアジアに進出する以前から、小規模ではあるが、ヨーロッパでも、アジア、オリエントでも、たびたび流行していた。しかし小アジアでは起こらなかった人口の激減という惨劇が、14世紀のヨーロッパに起こったことには理由があるだろう。「近代の誕生の時を特徴づけるのは、ヨーロッパの人類を襲った重い病気、すなわち黒死病だ。だからといってペストが近代誕生の原因などというのではない。それどころか事実が逆だった。まず最初に『近代』があって、それによってペストが生じたのだ。」⁽¹⁾ ジェノバやベネチア、ピサの海港都市によってビザンチン帝国やトルコ商人との間で営まれた地中海世界における貿易の発展は、荷物とともにクマネズミ⁽²⁾を運搬することによって、黒死病の流行の骨格を準備をしていた。十字軍と戦ったトルコにも武器を売っていたジェノヴァやベネチアという港湾貿易都市の商人達は、活発な商業活動を展開し、小アジアの各地域に居住区をもって貿易を営んでいた。「1346年には、ペストはアストラハンに蔓延し、そこからヴォルガ川を遡り、ドン川を下り、1347年黒海沿岸のカファで最初にヨーロッパ人民族に到達した。当時クリミア半島は当時ジェノヴァ人の手にあり、周期的にダッタン人と戦火を交えていた。」⁽³⁾ 彼らは退却する際に、“生物兵器”として、ペストに斃れたダッタン人兵士の死体を城壁内に投げ入れていった。これによってジェノヴァ人の間に黒死病が拡大した。彼らの貿易船は、夥しい商品ばかりでなく、野ねずみや黒死病の運び屋ともなっていたのである。

14世紀初頭には、目覚ましいほどに繁栄していた北イタリアにおいては、黒死病が流行する以前から不吉な徴候が続いていた。「フィレンツェにおける悲惨な洪水、頻発する『疫病』、^{いなご}蝗の襲撃、そして1324年にシチリーアを、1340年に『イタリアのほぼ全土』を襲った怖ろ

しい飢餓、1343年のある日アマルフィーの一角を全滅させた」⁽⁴⁾ 津波などが起こっていた。^{だいこうひょう}1346年の黒死病直前には、「トスカナ地方全土が凶作になり、1347年には異常な大降雹で農作物はまたまた重大な被害をうけた。」⁽⁵⁾ さらに「1348年にパードヴァとポローニャに、1349年に八百人の死者を出し、アクィラに続けざまに波及した地震」⁽⁶⁾ が起こっていた。またこれらの天変地異ばかりでなく、トスカナの二大都市、フィレンツェとシエナでは深刻な経済的不況を呈していた。「フィレンツェの二大銀行のイギリス支店が破産したことから、経済的危機、政治的危機を引き起こした。…1343年にベルツィ家が破産を宣告し、つづいて大アッカウオリ家、バルディー家をはじめフィレンツェの大抵の銀行と商社が破産した。シエナの名家も多くが破産した。」⁽⁷⁾ 不況のために輸入品が途絶え、政情は不安定化した。これらの動向は、黒死病の襲来とともに、人々に末世の徴候を感じさせるものであったに違いない。

イギリスにおいても状況は近似していた。「農民の経済水準は、1296年の対スコットランド戦争と1327年に始まった対フランス百年戦争によってさらに悪化した。」⁽⁸⁾ 戦費の捻出が農民に課され、農民階級の生活水準も出生率も低下していた。さらにイタリアと同様に異常な天候が数年続き、「1348年夏に頂点に達した降雨は、長引いた食糧不足とそれにつづく栄養失調、病気と伝染病に対する抵抗力減退」⁽⁹⁾ をもたらしていた。

1347年10月、「ジェノヴァの12そうのガレー船⁽¹⁰⁾ が近東からやってきてシチリア島のメッシーナに寄港した。乗組員は目も当てられない状態だった。」⁽¹¹⁾ その船は全シリア、ギリシャ諸島を汚染し、そしてアレクサンドリアにも寄港してナイル川全流域を汚染していた。メッシーナは黒死病に汚染されていることを知ると、ただちにガレー船を追放したが、時はすでに遅かった。黒死病の伝染を恐れてメッシーナを逃れた住民がすでに潜伏期の状態で感染しており、黒死病をシシリー島全体に広げていったからである。当時、「潜伏期」という身体的状況や概念は認識されず、無症状で潜在的に進む病理過程は、人びとの予想を越えていた。追放されたガレー船のうちの3隻は故郷のジェノヴァに向かったが、黒死病の発生の情報を知るや、「本国ジェノヴァは自国の呪われたガレー船が停泊地に近づくことを拒否した」⁽¹²⁾。しかし水際で押しとどめられずのジェノヴァでも、黒死病患者が発生し始めた。つまり経路はガレー船だけではなく、陸路を介しても広範に伝播していたのである。そして1348年の夏、黒死病は猛烈な勢いで人々を死に追いやっていった。それはネズミから人への感染以上に、人から人への爆発的な伝播が起こっていたことを示している。「夏の数ヶ月間に…フィレンツェの城壁内に住む9万の人口中、なお生き残った者は半数の約4万5千人であった。シエナは約4万2千人から1万5千人に減少した。」⁽¹³⁾ 「フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂では、130人の修道士が亡くなった。」⁽¹⁴⁾ これらの記述には枚挙にいとまがないが、統計学のない時代の数字の根拠には確証がない。

メッシーナに黒死病を広め、自国ジェノヴァへの帰港を拒否されて帰る国を失ったガレー船の1隻は、臨時の停泊地として、「1347年11月1日、(黒死病発生の情報が入っていなかった=引用者)マルセイユに寄港する。間もなく、司教、そしてつづいて教会参事会員が全員死んだ…。」⁽¹⁵⁾ 生き延びた乗組員が船を捨てたのち「港の沖で、幽霊船は、絹などの貴重な商品を満載していたのに誰も近づこうともせず、乗組員の遺体を乗せて風のまにまに漂っていた」⁽¹⁶⁾ という。その後黒死病はマルセイユからローヌ川を遡り、当時教皇庁がおかれていたアビニョンに到達する。教皇の侍医ショリアックは教皇に避難することを勧告したが、

クレメンスVI世は頑なにそれを受け入れず、逆に疫病を祓うことを意図して特別贖罪の聖年を早めた⁽¹⁷⁾。1348年4月20日の復活祭には120万人の巡礼者がローマに集まったが、荒れ狂う黒死病に生命を委ねたかのように、このうち帰郷できたのは、無惨にも僅か20万人だったという⁽¹⁸⁾。

黒死病は半年でフランスを突き抜け、6月にはイギリス領であった大西洋岸のボルドーに達した。イギリス本土には8月の上旬、「ドーセット州沿岸へ船で運ばれ、…（黒死病が）メルコムにおいて発生した。」⁽¹⁹⁾ 1348年8月20日、イギリスのエドワード三世（王位1327-77）が、スペイン支配を目論んでカスティリアのアルフォンソに嫁がせようとした15歳の王女ジョーンが、スペインへの途上のボルドーで黒死病ために死亡した⁽²⁰⁾。当時、イギリスとフランスは百年戦争（1339-1453）の渦中にあっただが、ヨーロッパにおけるこの闘いは、黒死病の伝播とそれによる犠牲を拡大したと見ることができる。「フランスとイングランドの戦闘によって、軍人と民間人の多くが死亡しただけでなく、疫病の伝播の一因になった。戦場に倒れている死体の腐敗や病人をともなった軍隊の移動はペストの原因になった。たとえば14世紀末にイングランド軍がこの病気をアキテーヌ地方（＝ボルドーを中心とする地方：引用者）に運んできた。さらに悪いことに、『盗賊団』や『私兵』も一役かった。かれらは幾多の休戦のあいだに解雇された傭兵で、『大軍団』を形成していた。かれらは通る道すがら、ペスト荒廃をもたらした。」⁽²¹⁾

イギリス国内では、ランカスター公爵が黒死病で死亡した。その娘を妃にしていたヘンリー一（王位1399-1413）は、莫大な遺産を手にして勢力を拡大させ、議会を動かしながら、ついにはエドワード三世を継いだリチャード二世（王位1377-99）をポンテクラフト城に幽閉・餓死させて王位を奪った。以後プランタジネット家はランカスター家とヨーク家に分裂し、百年戦争に引き続きバラ戦争（1455-85）と呼ばれる内戦に突入する。かくして黒死病は、王女の生命を奪うことによってプランタジネット家のヨーロッパ征服の野望を挫き、さらに王家の団結を切り裂き、封建貴族の内戦という集団自殺を演出しながら封建制の崩壊を促進しつつ、一方でペトルルカの恋人ラウラの命を奪うことによって、ルネサンス詩人の生涯にわたる類い希なる詩的情感の源泉ともなった。その後続くハプスブルグ家（神聖ローマ帝国）とヴァロア家（フランス）とのイタリア戦争、さらには血を血で洗った宗教戦争と、戦争に雇われ、あるいは休戦などで行き場を失った多くの傭兵たちの行動は、黒死病がヨーロッパに実に3世紀以上にも亘って居座り続けた大きな社会的要因であった。

8. ヨーロッパ社会の変動

黒死病の流行は、イタリアや西ヨーロッパの生活習慣を激変させた。瘴気によると考えた人々は、窓を閉め切り、今日でもバチカン美術館の回廊に吊されているような分厚いタペストリーを掛けて、空間を遮断しようとした。「中世の医師たちは、疫病が沼沢地から立ち上る瘴気と同じように空気伝染すると信じ込んでいたので、生活のスタイルを変えるように助言した。窓を閉め切って覆いを掛けなければならなかったので、裕福な人たちは分厚いタペストリーを買い求めた。」⁽¹⁾ また「医療の専門家たちは、頻繁な入浴は危険であると断定し、それを禁止した。衣服を脱ぎ捨ててしまうと、空気伝染する疫病に毛穴をさらしてしまうからである。かくしてヨーロッパは、入浴という習慣を失って誰もが刺激的な体臭をまき散らす時代へと

突入」⁽²⁾してしまった。ローマ時代を含め、かつてはあらゆる階級に開放されていた入浴施設はほとんど消えてしまった。香水は入浴の習慣を失って体臭に困惑し、また死体の腐臭や効果のない薬の臭いが充満していた社会の副産物でもあったのである。

1348～49年の黒死病の爆発的流行は、増加しつつあったヨーロッパの人口のおよそ30%にあたる生命を奪ったとされる。黒死病はその後も1360年代、1370年代と再流行し、その後数世紀に亘って断続的に流行し、それは18世紀になるまで続いた⁽³⁾。その影響の重要な側面は、黒死病の流行が一時的ではなく、断続的に繰り返し起こることで、長い年月に亘った人々の生活のあらゆる側面に、社会的かつ心理的な深い陰を刻印したということである。西ヨーロッパにおける犠牲者の正確な数字は今後も知られることはないだろうが、この人口動態的衝撃は、ヨーロッパの人口が回復基調になるまで3～4世紀を要した⁽⁴⁾。「1280年頃までにはイングランドの人口は600万人に達し、その四分の三が南部の中央部に住んでいたが、その後激減したイングランドの人口が600万人の大台を回復したのは、時代も下って18世紀の半ばのことだった。」⁽⁵⁾

しかし黒死病の与えた最も大きな影響は、人口の激変に伴う社会そのものの機能的停滞である。イギリスでは農奴解放（1180年）以後人口が急激に増加していたが、多くの農民からの徴税を期待したプランタジネット家の政策によって、すべての農民に自由民の法的地位が与えられ、農民の中からはのちにヨーマンと呼ばれる人々が現れ、地主になるものも現れていた。1290年土地の売買の自由化とともに農奴制は瞬く間に姿を消したと言われる。それでも「1340年頃、西ヨーロッパの富の60%と政治的な権力の殆どすべてを、ほぼ300の名門貴族が支配して」⁽⁶⁾いた。さらに「1346年頃、イングランドの耕作可能な最良の土地の三分の一は、教会が、具体的には、主教や大修道院長、カノンと呼ばれていた大聖堂の聖堂参事会のような聖職者組織、修道院が所有していた。」⁽⁷⁾しかしこれらの宏大な土地を耕す人口が激減した。そのことは、生産性や地代を支払っていた農民からの収入がなくなることを意味していた。「結婚、出産、死亡、相続といったプロセスを途方もなく大きな竜巻さながらに吹き飛ばしたのが黒死病だった。黒死病は紳士階級、とりわけ紳士階級の男子に通常よりも遙かに高い死亡率をもたらすことによって、数多くの名家の安寧、財産、社会的な地位をその土台から揺るがした。世代を超えて一家が維持してきた資産は、突然、遠縁の一族に吸収されてしまい、数多くの栄えある家名が社会と歴史からその姿を消してしまったのである。」

⁽⁸⁾農民であろうと、領主であろうと、あるいは貴族であろうと、中世社会で機能してた人間の死は、たとえば耕作する田畑を荒廃させ、村や領主のいなくなった荘園を消滅させた。労働コストによる経営の圧迫は、「1348年の大厄災の直後ではなく、一世代後の1370年に始まった…。その頃になると、地代を払って農場を引き継ぎたいと望んでいた余剰労働力が全く姿を消していたからである。」⁽⁹⁾。

とはいえ黒死病の影響についても身分制社会による格差は存在した。「イングランドの統計を見てみると、裕福な人々の死亡率は25パーセントに満たなかったのだが、それぞれの教区の司祭を含めた農民の死亡率は40パーセントを超えており、所によっては50パーセントにも達していた。」⁽¹⁾フランスにおいても「死は、主として貧民のほうへ向かってきた。そのありさまたるや、不運以前にはパリに大勢住んでいた担ぎ人足や日雇取りのうち、あとに残ったのはごくわずかに過ぎなかった。…プティ・シャン街区（ルーブル宮殿脇の貧民窟：引用者）にかんして言えば、かつてそこに大勢住んでいた貧乏人が街区一体から清掃されて

しまった。」⁽¹¹⁾

隆盛しつつあったイタリアの都市では、物流や人の往来が停滞した。「人々の集会は禁止され、浴場は閉鎖、公共の賭博場と市場は廃止された。」⁽¹²⁾ 感染した患者の家屋にあった縫製中の毛織物などが焼き捨てられ、その家のものは、罹患しているかどうかは不問のまま患者とともに家に強制的に閉じこめられた。労働者は失業し商人は商品を失い、商人が急速に没落し、あちこちの市場が閉鎖された。「バリケードで封鎖された家々や、通行禁止になった通り…そこを往来しているのは食糧補給班のみであり、ほかにはだれか司祭が通ることもあり、いちばん頻繁なのが情け容赦ない巡邏隊だ…。フィレンツェは死んでしまった。商売も、宗教上の勤行も、もう行われていない。たまさか司祭が街角でミサを挙げるにすぎない。幽閉された住民たちは、それぞれの窓越しにこっそりその進行を見守っている…」⁽¹³⁾ 幽閉された住民の中には、死の恐怖と隔離から逃れるために、見張りの番人を殺して逃走するものもいたという。各都市は、街の防衛のために黒死病の流行の情報を交換するようになった。北イタリアでは、ある都市での流行が知れると、その都市からの人および商品の流入は留められた。これらの結果は、失業と経済的恐慌や不況であり、溢れる困窮者への食料や隔離に要する費用のために、各都市は存続の危機に直面する始末だった。「全面的検査が科せられたときこの町がこうむった損失を見積もることは不可能である。検査によって、外出が不可能になり、土地を耕することも、作物の世話をすることもできなくなった。」⁽¹⁴⁾ 「田舎の散在している部落や畑地では、哀れな貧しい働き手や彼らの家族の者が、医者の手もわずらわさず、あるいは召使いの世話もうけないで、道ばたや、耕作地や、家の中で、昼夜をわかつたず、人間というよりも、まるで畜生のように死んで」いった。⁽¹⁵⁾

人口の激減は、社会がそれまでに蓄積した富の浪費と集中をもたらし、メディチ家のような富豪の台頭の背景を作ったが、一方で食料価格の下落、農奴制の残滓として存在していた農民たちの自発的な共同作業的労働の廃止を求める姿勢、農民への百年戦争への軍費負担への不満などが絡まって政治的、経済的危機を膨らましていった。「黒死病から生き残った人々は、めったにない繁栄に遭遇したのである。すなわち生存者一人当たりさらに多くのお金、家畜、穀物が天から降ったように転がり込んできた。」⁽¹⁶⁾ 「物が極度に豊富にあったため、下層民は男も女も、習い覚えた手職で働こうとせず、一生のうちに最も豪華な、最も美味しい料理を食べようと、恐怖に青ざめた顔で結婚に踏み切るのだった。召使いも卑しい女も皆、死んだ高貴な身分の奥方の豪華な衣服を身にまとった。」⁽¹⁷⁾

労働力不足による賃金の高騰は、イギリスにおいては、地主や領主をして賃金を黒死病発生以前の賃金に戻すというあからさまな労働者規制法（1351年）となって現れる。黒死病から生き延びながらも人間の生の儚さを悟り、同時に奢侈にふけり、また自分が何ものであるかを問い始めた人々は確実に権利意識を増大させ、それらは社会構造一般への反発となって爆発した。

黒死病により、潜在していた税金負担に関する社会不安はより増大していた。フランスではパリ市長で商人会頭でもあったエチエンヌ・マルセルが、徴税の刷新を求めながら、王権をパリ市の地区自治体を代表する三部会の統制下におこうとして武装した労働者を動員した（エチエンヌ・マルセルの乱 1358年）⁽¹⁸⁾。徘徊する野盗武士団の徴税に苦しんでいた農村でも、自然発生的に、しかも「大農民や富裕な人、ブルジョア、その他の人々」⁽¹⁹⁾を加えた暴動が発生した（ジャクリーの乱 1358年）。「大多数は、税金の強要に対して蜂起し、早鐘によつ

てかき立てられ、怨恨の念によって励まされ、また貧しさに耐えきれなくなった農民たちであった。彼らのあるものは強制によって加盟させられ、あるいは恐怖から、集団的行動から逃れることのできない者たちであった。『白百合の花の描かれた』一揆の旗をみて、国王のために奉仕するのだ、と信じ込んだものさえいたのである。』⁽²⁰⁾ エチエンヌは、ジャクリーの乱と合流する形で手を結んだが、ナヴァラ王の指揮する騎士軍は報復を含めて農民を徹底的に鎮圧し、一方孤立したエチエンヌは従兄弟によって暗殺された。

北イタリアの各都市ではイギリスからの羊毛の輸入が激減し、シエナでは、市の政治的実験を巡って相次いで騒乱が繰り返されていた。1371年300人の織布工が賃上げを求めて蜂起し、富裕な者の家屋を略奪した。フィレンツェでは、毛織物商の資格のための登録料が独占を意図するものたちによって4倍に引き上げられ、これによって生活向上の夢を打ち砕かれ、生活に窮したチオンピ⁽²¹⁾による暴動が発生した(チオンピの乱1378年)。かれらは改革プログラムを市の執政府に提出し、政務委員の退陣をもとめて一時市政の実権を掌握した。この「フィレンツェの闘争は、ローマ風の抗争以上に、すでに根深いところで19世紀初頭の産業化したヨーロッパを思わせるものであった。』⁽²²⁾

一方フランスで防衛戦を闘っていたイギリスは、戦費調達のために1380年、それまでの3倍に当たる人頭当たり1シリングの均一課税を議決した。司祭であったジャンポールは、農奴制を批判する説教を続けたためにカンタベリー大司教に捕えられて一時囚人となったが、釈放されると「アダムが耕し、イブが紡いだとき、だれが地主(ジェントルマン)だったか」と農民を扇動し、農民の反乱は一挙に燎原の火のように拡大した。彼らはワットタイラーを首領として、隷農身分の開放を求めながら、複数の監獄の囚人を開放し、ついには最も強大な地主であったカンタベリー大司教サイモン・サドベリーの首をロンドン塔の丘の上で刎ね、高位聖職者の保有地の分配を主張して王国の政府を追いつめたのである(ワットタイラーの乱1381年)。

黒死病が急襲した14世紀は、劇的な人口変動と多くの社会的矛盾に晒された動乱の時代でもあった。ヨーロッパ各地で勃発した一連の一揆は、恒常的な社会制度への展望や組織をもつものではなかったために、最終的に鎮圧されたとはいえ、黒死病がもたらした中世への晩鐘ともいべき社会構造上の巨大な歴史的暴発だった。かくして黒死病は「すでに弱体化していた封建制に打撃を与え、封建制は二世代の間にほとんどその意味を失い、百五十年間で完全に消滅」⁽²³⁾したのである。

9. ルネサンスの奈落

「中世は一種独特の矛盾に充ちた姿を私たちに見せる。一方の側に幸福な平安、壮大な真昼時の静寂があって、生きとし生けるものを照らし守りながら包んでる。もう一方では、大規模な不和、心の奥底の動揺と混乱のドラマがある。だれもが神の中に安住し神に守られていると感じていた。』⁽¹⁾ 社会は変更不可能なものとして神によって構造化されていると考えられていた。両親が農民であれば、かならず自分も農民であると考え、他のものになることを期待もしていなかった。「身分を変えることは、中世の社会秩序においては不可能に近かった。身分階級は神によって創られた現実で、動物界で犬が犬、猫が猫であるのと同じように、今さら変えようがないものと思われていたからだ。』⁽²⁾ 中世においては「新しさという言葉

を耳にすれば、人は恐怖と嫌悪でいっぱいになった。」⁽³⁾ このような世界の解釈と態度は、普遍的なものこそが現実を構成するというキリスト教の中心思想で強化された。「普遍性は具体的なものに先立つ、…普遍性が具体的なものごとの原因」⁽⁴⁾ であり、この普遍性とは絶対的真理としての神の存在とその教義であった。中世の人びとにとっては「世界は信仰の現象」⁽⁵⁾ であり、彼らはすべてのものに神を感じ、神を観たのである。

「中世においては、意識の両面—外界に向かう面と人間自身の内部に向かう面—は、一つのヴェールの下で夢見ているか、なかば目覚めている状態であった。…人間は自己を、種族、国民、党派、団体、家族として、あるいはそのほかの何らかの一般的なものの形でだけ、認識していた。」⁽⁶⁾ 普遍性を原理とする社会にあって、個人というものが社会的存在として認識されることはなかった。「あるのは個人の所属する身分階級だった。説教師には個人格がなく、カトリック教会の恵みを人々に分かち与えるためだけの存在だった。説教師自身が何ものであるかは、どうでもよいことなのだ(傍点引用者)。」⁽⁷⁾ なぜならば、「聖職者は、伝道者あるいは説教者となるのではなく、何よりもまず礼拝と救済の執行者であることが要求されていた。…この時代の典礼は神学や神秘思想や司教教書とさえ何の関係もなかった。それは単に技術であり、権利であった。」⁽⁸⁾ このゲマインシャフト(社会共同体)的な人間集団の中で、人々は「己の」死を、他者の死と同様に不可避的な人間の循環の自然な出来事として受け入れていた。キリスト教社会であるかどうかにかかわらず、「死はあらゆるところの偏在していた。…どの年齢層にあらうとも死ぬ可能性には大差なく、実際に人の死は日常茶飯事であり、ある日突然死が訪れることがあった。現代との違いはそれだけではない。死者たちは死後も人間社会の一員でありつづけた。死は移行を意味した。すなわち死は状態の変化であって、終わりではなかった。生者は死者に対する義務を色々と負っていた。最も重要な義務はメモリア、すなわち死者の記念だった。…死者の名前、家系、遺産を維持することだった(傍点引用者)。」⁽⁹⁾ 人々は「祖先の名前に一部や、同じ名前を繰り返し用いることによって、家系や個人が特有の名と祖先に連なることを意識」⁽¹⁰⁾ し、義務の不履行は罰を受けるという意識とともに、さらに死者のクロニクル年代記を書くことによって、祖先との連帯感に支えられて生きていたのである。死は規定通りの宗教的儀式として定式化されていた。「死を前にしての伝統的な態度は惰性と継続の塊のように…和やかで、対して重要ではないものとする昔の態度」であった⁽¹¹⁾。この世の別れはまず「愛した人々や物に対する悲しみに満ちた、しかしとも控えめな想起、若干の影像に要約される想起行為」に始まり、ついで「死に行くものの床を囲む友人やつねに多くを数える列席者に対する許し請い」である。そして個人的な人生への「懺悔」であり、最後に「魂の救いの祈り」であった⁽¹²⁾。

キリスト教の拡大にともない、フランクヤスカンディナヴィアの社会にあっては「キリスト教への改宗は個人ではなく集団として行われた。」⁽¹³⁾ しかし、改宗以前の先祖たちの改宗が教義に認められていなかったために、さらにまた征服の文化的・政治的基盤の確立のために、冠婚葬祭の儀式への干渉は少なかったとはいえ「征服された人々は先祖との絆を断ち切ることを強要された」⁽¹⁴⁾ のである。中世の中—後期に至ると、個人の死と現世とは密接な関連が意識されるようになる。墓地は町の外ではなく、教会の中に作られるようになっていたし、死者は隔離された世界のものとしてではなく、生きている者達を見守るものとして敬われ、墓参りに見られるような身近なものとして受け入れられていた。「中世末の人間は、自分が執行猶予中の死者であること、猶予期間は短く、死は常に自分の内部にあって、おのが野心

を砕き、おのが快樂を毒していることを、強烈に自覚していた…。そしてその人間が、今日のわれわれにはおそらく寿命が延びたために理解しにくいような、生への情熱をいいていた…。」⁽¹⁵⁾「近代文明をつくることになるものの基盤が置かれたあの十二世紀から十四世紀にかけての中世中期においては、死についての前より個人的で内的な感情、己の死の感情が、人生のもろもろに対する強烈な愛着と、そしてまた—これが十四世紀の死骸を好んで描く図像の意味なのですが—挫折と死すべき運命との混じり合った似合い感情、『存在し足りないことへの不安』(傍点引用者)」⁽¹⁶⁾を表していたのである。

多くの人々によって「生の謳歌とたたえられるルネサンスがじつは、つねに死への恐怖におびえていた。…死にまつわる祭儀、生のはかなさに関する論述、死をこえてなお記念される生のために顕彰。どれもが、ルネサンスの芸術や思想をささえる。」⁽¹⁷⁾。ホイジンガは「中世の秋」で、当時の人びとがもっていた死のイメージを描いている。「15世紀という時代におけるほど人びとの心に死の思想が重くのしかぶさり、強烈な印象を与え続けた時代はなかった。メメント・モリ⁽¹⁸⁾の叫びが、生のあらゆる局面に、とぎれることなくひびきわたっていた。」⁽¹⁹⁾「この時代は、目に見える恐怖、約言すれば無常性そのもの、すなわち肉体に腐敗を映す鏡を前に据えたのであった。」⁽²⁰⁾クリュニュー修道院僧は語る。「肉体の美は、ただ皮にのみ存している。なぜというに、皮の下にあるものを…みることができれば、ひとは、女をみておぞけをふるうことになろう。女の魅力は、ただ粘液と血液、体液と胆汁とに存する。いったい、考えても見るがいよいよ、鼻の孔には何があるのか、喉の奥には何が、腹のなかにはなにが隠されているのか。みつかるのは、ただ、汚物のみ。その痰だの糞だのには、指一本だに触れようとしな、そんなわれわれだのに、いったいどうして汚物袋を抱きたがるのか。」⁽²¹⁾終末の意識は、確実に生活の中に根をはった。「美の終わりを説く思想を産むに留まらず、美そのものまでの疑わしめずには置かないのだ。…死を想え、地上の美のうつろいやすいやすさを想えとの宗教のいましめと、美のおとろえを知り、もはやその愛人に美を与えることのできない我が身を嘆く、年老いた女の悔恨との間には、殆ど境界の線が引けないのである。」⁽²²⁾そしてなおホイジンガは続ける。「16世紀もだいたいおしつまるまで、墓石には、はだかの死体の恐ろしげな姿がさまざまに描かれていたものだ。…手足はけいれんしたように硬直し、口をはっきりとあけ、むき出しの内臓には、うじ虫がからみあっている。この時代、死の思想は、ついにこの恐怖のイメージにとらわれた観があった。」

⁽²³⁾しかるに「死のイメージは骸骨ではない。たちわられてうつろな腹をぽっかりとあけた、まだすっかり肉の落ちてはいない死体である。」⁽²⁴⁾腐敗していく肉体は死骸ではなく、人間の崩壊の過程として捉えられている。その肉体にウジ虫が湧く異様な状況の描写に関する死骸趣味は、マカーブル⁽²⁵⁾と呼ばれている。このマカーブルには、死というものと極めて親密であった中世に人びとに、これまで目に見えなかったもの、あるいは閉ざされてきたもの、しかし厳然として進む人間の「死」の過程を白日のもとにさらけ出すという、ある種の開放の意識が芽吹いていた。死骸趣味的イメージは「死への恐怖をも、あの世への恐怖をも意味しなかった。それらはむしろ、ルネサンスの入り口における、生への熱烈なる愛と、生の脆さに対する苦汁にみちた意識の徴であった(傍点引用者)」。⁽²⁶⁾それは恐怖や悲惨さの表現というよりも、これを見る人びとにとって、現実を直視するという潜在的な「喜び」すら伝えてくるのである。中世の厳然とした階層社会においても、しかし死は誰にでもどのような階層の人にも平等に訪れることをマカーブルは伝えてくる。換言すれば、そのようなポジ

タイプな情念に支えられなければ、このマカーブルは不可能だったと言える。

中世の人々に黒死病が与えた強烈な死のイメージは、ルネサンス期を覆ったこの世の儚い生に対する認識を変えていったと思われる。ルネサンス芸術にみる生き生きとした生命のリアリティーは、個性の顕在化であると同時に、一方で絶望に瀕した人間の鏡像のようなエネルギーの発散であったのかもしれない。次々と生命を奪っていく黒死病に、為す術もなく右往左往する人々の恐怖への試練は、秩序ある人間関係や生死に関わる社会的構造を打ち砕いた。「かつて人は、公に生まれるのと同様に、公に死んだ。…誰かが『病床に横たわる』とすぐさま、彼の部屋は人々、すなわち親戚、子供、友人、隣人、信徒団体のメンバーで一杯になった。」⁽²⁷⁾「人は死よりも死後の運命のことを強く恐れ、…最期の瞬間に封印されている救済のことを心配していた。」⁽²⁸⁾そして「一人で、突然に、準備もなく死なないこと、信心会の助けと祈りを受けること—これらのごとすべてが、良い死を迎え、臨終の時に許しを与えられることをより確かにする」⁽²⁹⁾ものだった。しかし、自分の愛する人々や慣れ親しんだ社会に暖かく見守られて横たわる病床は最早なく、黒死病は死床で見送る人々を蹴散らした。「人はつき添う人もなく死に、聖職者の立ち会いもなく埋葬され、父はその息子を見舞うこともなく、息子は父を見舞おうとしなかった。慈善は死に、希望は絶えた。」⁽³⁰⁾多くの人が、祈祷や懺悔に要する時間的余裕すらなく、回りの人々の何らの気遣いすらあてにできず、孤独に死んで行かなければならなかった。無惨にうち捨てられる肉体の数々は地獄を連想させることによって、死は何の支えもない無力で孤立した「恐怖」への道となったのである。地上の生に関する教会の聖なる教えや、天上の神に対する畏敬によっては最早償うことのできないほどの累々とした孤独な死体の数々は、地上における人間の生死を、これまでの中世的思考の枠内で了解することのできない圧倒的な現実として直視させたと考えられる。逃れられない死をイメージし、一方でそれは生への愛着を呼び覚ますとともに、略奪される生命からの反撃であるかのように、ルネサンス期の人間の生存や生命へのエネルギーが、恐怖というもっとも強烈な人間の情熱をして中世的秩序を打ち壊し始めた。神の試練として考えられる程度を遙かに超えた黒死病による社会の激変の渦中において、人々は、世界を確実に説明する筈のカトリック教会が、これらの試練に無力なを感じ取っていた。愛する妻を奪った黒死病に対する憤慨を、人間の敵である死神への激しい告発として、この世の秩序や生死の意味の問いにまで高めた「ボヘミアの農夫」⁽³¹⁾のように、人々は崇高な祈りや神の啓示に半ば敵対してまでも、死に行く人への哀しみを実感として、人間の死を血肉化させたのである。

10. ルネサンスの双生児—個性と私性—

黒死病の衝撃は、神から守られている筈の中世世界の社会の構図に限りない疑いと空しさと、そして邪悪ではあっても、人間自身の原始的な開放をも孕んでいた。裁判官ばかりでなく、市の役人、軍人、高位聖職者などは、ペストから逃れるために職場を放棄した。「悲嘆の最中に、淫蕩、盗み、人殺しがほしいままに横行した。取り締まるものも、懲罰する裁判官もいなかった。」⁽¹⁾すでに動けない瀕死の患者を横目にみながら、家屋内の財産が略奪された。しかし一方で、最後の一刻までも人間であることを慈しみながら、あたかも死を受け入れた殉教者のように、「互いに病原菌を移しあっていっしょに死んでいく夫婦や、すでに死に運命づけられていた我が子に自分が死ぬまで乳を与えつづける母親たち」⁽²⁾がいた。

ルネサンスは、黒死病の恐怖と諦念の記憶に彩られながら、一方で人間の邪悪な「私性」を織り交ぜた「個性」を演出する。ルネサンスが、教会的思考の桎梏を拒絶するように開放的であるのは、個性の発見やその実現の可能性という側面とともに、この世のはかなさに裏打ちされた中世的キリスト教信仰の客観化ないし脱却の始まりであったからであるように思われる。すべてが宗教であった時代が変質し、「宗教」という言葉が出現する。デカメロンに見られるような反宗教、反理性という側面は、利他的ではあるにせよ、将来の死様を予期した人間の「許された生の時間」を生きようとする、この世の無常への認識が介在してははずである。ルネサンスという一連の大きな流れの中で指摘できるのは、かつてはローマ帝国をも食いつぶしながら肥大化した、秩序だったキリスト教的世界への宗教的信条の揺らぎであり、あるいは諦念にも似た離脱であり、報われないうための虚脱でもあった。

しかし一方、絶対的権力者たる創造主によって合理的に構築されているものと理解されていた中世世界において、現実が信仰を越えた惨劇を人々に与えたとき、現在生きていることの意味を、同じ秩序の中で見いだそうと自暴自棄になった一部の民衆は、集団ヒステリーを引き起こし、自分を鞭打ちながら行列（鞭打ち苦行団）を作り、街々を徘徊しながら逆に黒死病を広めていった。彼らの行動はある意味では論理的だった。「黒死病は神の懲らしめである。それゆえ鞭打ち苦行者は自身を懲らしめることによって神の懲らしめを迂回させようとしたのである。」⁽³⁾ アイデンティティの危機とも言える状況の中で、人びとは壊れ行く自己の世界認識を防衛するかのようになり、惨禍の原因を社会的少数派に転化することで出来事の因果関係を理解しようとした。隔離されていたハンセン病患者やユダヤ人の大量虐殺事件が引き起こされ、拷問に掛けられたユダヤ人が、毒薬を井戸に投げ入れた廉で、「本人の自白」とともに処刑された記録が残っている。「この点をことさらに煽り立てたのが、托鉢修道会士たち」⁽⁴⁾であった。「彼らは、社会に生起する事件をことごとくユダヤ人金融業者に対する告訴に結びつけた…それを野外説教で強調」⁽⁵⁾したため、「托鉢修道会士の野外説教は、いつも直後にユダヤ人の大量殺害を引き起こし」たのである⁽⁶⁾。「バーゼルでは、鞭打ち苦行者とペストが町を訪れ後、洗礼を受けたユダヤ人も火あぶりにされた。」⁽⁷⁾ユダヤ人の「母親たちは、夫が火刑台で焼かれるのを見ると、子供をかかえて焔に飛び込み」、最早逃れられないと観念した人々は、「ユダヤ教会に集まって、みすから火を放った。」⁽⁸⁾「市当局は、ユダヤ人たちが激昂した群衆の手に落ちるのを良しとしなかった。もっとも恐れていたのは、彼らが自宅に火をつけ自殺するのを手をこまねいて見ていて、その結果町全体が火の海になることだった。…そこでバーゼルでは、ラインの小島にわざわざ木造の小屋を造り、そこにユダヤ人を押し込めて火をつけた。」⁽⁹⁾虐殺を逃れたユダヤ人たちは、庇護を求めてポーランドに至り、かくして「事業経営と伝統的な学問に秀でていたばかりか、宗教的、文学的な表現において革新的だったユダヤ人の大居住地が東欧に生まれたのは黒死病の直接の所産だった」⁽¹⁰⁾のである。これらの人々の末裔は、20世紀に再び惨劇を被ることになる。

カトリック公会議、ローマ教皇、神聖ローマ皇帝、諸侯、都市貴族、職人組合、そして僧侶など、種々の不安定な対立的構図が錯綜したイタリアの特殊な政治情勢の中に生まれたルネサンスは、黒死病という陰によってさらにその輪郭は鮮明になる。14世紀～15世紀にも続いていく黒死病は、上記の悲劇を内包しながら、一方で、ルネサンスの開放的な、ある意味では邪悪で粗悪さを含む個人の出現と、個々人に許されている生の時間を、いかに生きるかという自問の上に成立する個人の能力を展開する意欲の時間へと変えた。その時間の中には、

暴力や私利私欲、あるいは権勢から芸術に至まで、あらゆるものが許される特殊な状況と空間がある。人間を個人として成立させていく社会学は、個人の中に己れを社会的に賦活しつつける「個性」と、他者を顧みない利己的で貪欲な経済的「私性」を孕むことによって、個人の内面における葛藤と相剋の弁証法を形成するようになる。

ルネサンス期における人間の予想を遙かに超えた、これまで経験したことのない自然の暴虐の経験が、いわば善悪を越えた人間の荒々しい「内面」を開眼させ、宗教的道德性やそれが求める抑制をかなぐり捨て、いわばその反教會的思考であらゆる側面の個人を磨いた。「13世紀の末になると、イタリアには個性の人物がうようよははじめる。…14世紀のイタリアは、およそ誤った謙遜や偽善ということ、あまり知らない。人目に立つこと、他人と違っていること、ひとと違ってみえることを、恐れる人間は一人もいない。」⁽¹¹⁾ イタリア・ルネサンスは、恰も夜空に打ち上げられた花火のように、色彩豊かな個人を開花させ、そして余韻を残しながら消えていった。ジオットやブラマンテの建築、ダヴィンチやミケランジェロなどの絵画・彫刻、あるいはダンテやペトルカカの文芸ばかりでなく、チェザレ・ボルジアを代表とする権謀術策の権力や、メディチ家に象徴される巨大な富の蓄積と所有など、人間存在のいわば現世的な自由と感性を重要な価値として意識し、中世では抑圧されていた個々人の内面的な禁欲思想を開放し、陰に陽に、具現化した。マキャベリは、「支配者の行動を、国家理性によってのみ制限する点で、キリスト教世界の根底をなす政治原理を無効にした。」⁽¹²⁾ 同時にこれらの人間の創造性の追求は、中世の人々が思い描いていた世界の構造、すなわち天界の視点から地上での生き方を考えるという思考に抵抗する現実主義的であり、その意味で世俗的な生命のリアリティーを追究させた。すべてが神に収斂するキリスト教の教義によって縛られた禁欲思想からの開放と現実主義は、中世が持たなかった近代への視覚である。ルネサンスが黒死病という死の恐怖に晒された暗黒の部分で、人間の精神の深奥に現実の儚さと哀れさを刻印しながら、個的人間として今ある自分を冷徹に見直し、それによって賦活されたこの世への現実主義的な生への情熱を帯びていたとすれば、黒死病は近代の扉を準備したといえる。

しかし一方で、ルネサンスの開放的で現実主義的な態度は、あるがままの現実を受容し、むしろそれを利用することによって存在したために、地上の既存の秩序を前提としていた。したがってルネサンスは、社会的には、中世キリスト教権力や貴族権力に対抗したのではなかった。それは経済的資産を集積することで既成の世俗権力に対抗した新興中産階級のいわば装飾の範疇を越えることは出来ず、むしろの中でしか生存できなかったし、個々人の様々な能力と高潔な人格形成への憧憬をもってはいたが、個性の社会的な解放や展開を意味するものではなかった。この意味では、古代の再生として考えられる様々な中世への反措定を内包しつつも、ルネサンスは「結局、絶対主義と抱き合うに至り、この絶対主義国家の建設を助け…カトリック教会と抱き合い、総じて反宗教改革の文化として」⁽¹³⁾、すなわち中世社会の枠組みの中に属していたといえる。ルネサンスの新しさとその限界は、庇護者やパトロンを求めて転々と流浪し、「仮にも成しとげられたことが一つでもあったか…？」と過去を痛惜しながら、ついには異郷のフランスで客死しなければならなかったダヴィンチの言葉に表現されているかのようである。にも拘わらず、ブルクハルトをして「ルネサンスのこの一つの成果だけでも、われわれを永久に感謝の気持ちで満たすことができる」⁽¹⁴⁾ といわしめたもの、それは黒死病という恐怖の経験を通してではあるが、人間が有している理性や個性を通して、

今日もなおおたちを賦活し、魅了して止まない私たち自身の自由とその本性が、無限の可能性とともに明確に認識されたという点にある。ピーコ・デッラ・ミランドラ（1963-94）⁽¹⁵⁾は、あの有名な一節を、神託の形式を借りて私たち人間に呼びかける。「（神である）私は、おまえ（人間）が自分のまわりをそれだけ簡単に眺められるように、…世界にまん中に置いた。おまえが、おまえ自身の形成者となり、克服者となるように、…。おまえだけが、自由意志による発展と生長を持っている。おまえはおまえのうちに、あらゆる種類の生命の芽をもっている。」⁽¹⁶⁾

「あらゆる種類の生命の芽」は、やがて近代的個人の成立を内的に準備し、あるいは人命を犠牲にしてもならん恥じることのない排他的で利己的な私性を研ぎ澄ましていく。自己は、社会的・共同体的存在としての自己と、孤立的存在としての自己との分裂を開始し、さらに人間の普遍的な可能性としての個性と、排他的で利己的な私性に切り裂かれていく。自らの無限の可能性に気づきはじめた人類は、その可能性を阻害するあらゆる桎梏を振り払うように、「個性」の双生児ともいべき自身の邪悪な「私性」を引きずりながら、個の創造と個的自由の獲得を目指す輝かしい近代の歴史的過程の中で、最も過酷な代償としての内的孤独と闘う道を模索し続けることになるのである。

11. 黒死病の病因論と公衆衛生

中世の黒死病は、ペストだけが原因ではないとする傍証が報告されている。それは、潜伏期間が3～4日という短い期間での死亡例や、発熱やリンパ腫脹を伴わないいわばペストの病歴にそぐわない多数の死亡例があったこと、冬季においても夏期と同様に激しかったこと、人口密度の少ない地方でも猖獗を極めたことなどである。炭疽菌や出血熱、あるいはリケッチャ性疾患などの複合的伝播があったのではないかと推定する学者もいる。その全貌が今後解明されるかどうかは不明であるが、黒死病は圧倒的な勢いで死者を生産した。死者は死体運搬埋葬人（ベッキーノ）⁽¹⁾によって、一つの棺に何人も重ねられ、荷物のように埋葬された。かつてのように、親近者の涙で囲まれて送られる人は稀だった。黒死病は「病気の患者から健康者に、ただ会うだけで、伝染していった…患者と話したり、患者に近寄りたりすることが、健康な者にとって罹病や、また死の原因になったばかりでなく、患者が手にふれたり、使用した衣類や、その他の品物にふれると、ふれたものにまた病気がうつると思われた」⁽²⁾ 黒死病の感染力の強さが、筆舌に尽くしがたいほど急速で徹底的だったため、医師ですら「患者の視線」を恐れた。教皇の侍医ショーリアックは「大外科学」に次のように書いている。「ペストには二種類あった。前者は二ヶ月間つづき、持続熱と咯血を特色とし、発病後三日以内に死亡した。後者は残りの期間ずっと続き、やはり持続熱と主に腋下部と鼠蹊部にできる…膿瘍を特色とし、五日後に死亡した。後者は劇症で、とくに咯血を伴う伝染病だったから、そばにいただけでなく見るだけで感染した（傍点引用者）。」⁽³⁾ その機序として、「患者が苦しんでいるときは、毒性のある『種』が凹面上の視神経を通して脳から放射されると考えられた。」⁽⁴⁾ モンペリエの医師ベルナル・ドゴルドンもペスト患者の息に危険性を感じ、「基本的な予防は病人に顔に布を当てること」⁽⁵⁾ と考えていた。その診断書には「ペストが広まるのは患者の眼差しのせいだとして、医師や司祭たちが、患者に前もって目を閉じるか、垂麻布の蔽うかするように要求すべきだと」⁽⁶⁾ 忠告されていた。

当時「潜伏期」という概念は全く理解されていなかった。だからといって、症状がなければ感染していない、と考えた訳ではない。なぜなら、1347年メッシーナの住民が、流行する黒死病から逃れようと他の町に避難しようとした時に、他の町の人びとはメッシーナの避難民を援助しようとか、助けようとしなかったばかりか、避難民が街を出ていくことを期待した。助けを求める避難民に、住民は「何もいうな。あなたメッシーナのひとだから」といって忌避した。私たちは今日でも、「疾病」そのものと、疾病に罹患した「人間」とを区別する考えかたに慣れていない。それは罪人と罪とを区別する考え方が浸透しないことと近似しているかも知れない。汚染した大気 (bad air) や人を介して伝播するという認識は、原因の探索と黒死病の発症率の高い地域を隔離し、人的交流を遮断するという政策に行き着く。さらに原因不明の恐怖にさらされた集団がとる態度は「攻撃」であり、その攻撃は社会に固有の標的に向けられた。社会的に富裕だったユダヤ人は、黒死病を意図的に振りまくと指弾され、隔離された。そして差別的かつ攻撃的感情に突き動かされた大量虐殺事件が、特にドイツで頻発した。その後数世紀に亘って続く魔女狩りもまた、黒死病の恐怖に戦く民衆に起こった宗教的狂気であった。

しかし、黒死病がなぜ起こるのかという原因への疑問は、生命の破滅を回避しようという考えの途上に「予防」の概念を孕まざるをえなかった。黒死病が神の意志であり、それと戦うことは神の冒瀆であると考えるなら、信心深い人間は戦わなかっただろう。いや、15世紀においてすらドイツ神秘主義思想の「巡礼者の書」は黒死病についてこう伝えている。「神への愛なき者は、この災いを逃れることはできない…神は生かしておこうと思うものには恩寵を与え、薬または転地によってこれを救うのである。これは神の意志によって行われるのである。」⁽⁷⁾ また16世紀のルターでさえ、「ペストは神意であり、神による懲罰なのである」⁽⁸⁾ と考えていた。しかし、予防可能であると意識させたものは、それが神の意志であるかどうかとは無関係に、発症が人間の努力で回避できるということを知ることから始まる。黒死病の拡大の様式については、人から人、豚や猫、犬などの動物、また患者の衣類や絨毯などからも伝染することを、人々は見聞していた。すでに1348年、グラナダの大臣であり、歴史家でもあった医師、イブヌ・ル＝ハティーブ (1313 - 74) は「それが伝染するということは、経験、研究、知覚、検屍、確実な証言によって確認される。これらの事実は議論の余地のない証明である。…その病気にかかった者と接触した者が、どんなふうに同様に病気になり、それに対して、何の接触もしなかった者が助かるか…さらにその伝染は、ある港へ疫病に犯された国から誰かがやってくることや、隔離された人々の免疫性によっても証明される」⁽⁹⁾ という「接触感染」の概念を明確に持っていた。しかし、14世紀末までのヨーロッパの医師たちは、伝染性のものであると疑わせるに十分な客観的現象を目撃していたにもかかわらず、黒死病の原因が汚染された空気、すなわち瘴気に由来すること、そしてそれが人から人へと伝播するものであると信じて疑わなかった。飛沫感染による肺ペストに限定すれば、それは部分的には正しかった。そしてその瘴気中にミアズマ (病原素) が存在すること、さらにそのミアズマに晒された個々人の体液の均衡状態が、黒死病への抵抗性ないし感受性に関連し、したがって死亡するものと生き残るものがあるものと考えられていた⁽¹⁰⁾。

黒死病の大流行を受けて、ベネチアでは1348年3月30日に街の大評議会が開催され、黒死病の緊急事態に対応するために、臨時的な対応策として三人からなる臨時の委員会を設けた。ベネチアは「東洋との直接的交流から経験を集めていたし、かれらの公的な養生法のために、

アラビアの手本に従ってアラビア人に医師たちを任命していた。」⁽¹¹⁾ 同時期に北イタリアの諸都市（ルッカ、フィエンツェ、ペルージア、ピストイア）は黒死病感染の疑われる品々が市内に入ることを禁止する法律を作った⁽¹²⁾。

2度目の黒死病がヨーロッパを襲ったとき、接触感染の認識は広まっていたと考えられる。海上から船で訪れる黒死病の破壊的な経験をもとに、1374年ベネチア共和国、そして1377年のラゲーサは黒死病流行地域からの船舶の入港を30日間押しとどめ、その船に黒死病の乗組員が発生しないことを確認するための隔離制度を始めた。つづいて1383年マルセイユはこれを踏襲し、しかも隔離期間を40日間（Quarantine=検疫）へと延長した。今日から見れば、ペストの潜伏期間は多く見積もっても10日以内（3～7日）である。ヨーロッパの諸都市は、黒死病流行への恐怖と、その原因の不確定性のために、隔離期間を過大に見積もったと言える。しかし、港において船舶の入港を40日間押しとどめたという歴史的事実は、黒死病が伝染性のものであり、しかも一定期間の観察期を経過すれば発症することはなく、感染源はないと判断できること、さらに重要なことは、船舶を追放するのではなく、貿易が継続できることを経験的に認識し、予防的措置を社会的制度として実行したことである。検疫はまさに船から運び込まれてくる感染源に対する「潜伏期」の認識とその確認過程として確立されたのである。これは陸上交通や流通にも適用され、国境や都市の城門は感染の疑われる人間や商品に対して検疫を行うようになった。人々は、やがて各都市が発行する「衛生通行証」の携帯を求められた。これは今日のパスポートの原型となった。

1440年以降の黒死病の再流行の時期には、各都市もベネチアを見習うように、再三の黒死病流行に対して「公衆衛生担当長官」（ミラノ1437年6月）や、中央政府の恒常的な行政組織として「衛生局」（ベネチア1486年10月）ないし「保護官」（フィレンツェ1448年9月）などを設置し始めた⁽¹³⁾。繰り返す黒死病の流行は、その被害を最小限に押しとどめ、流行を終わらせようとする人間の努力となって顕在化する。しかし、多くの都市が恒常的に公衆衛生担当官を配置するようになったのは、16世紀になってからである。これらの衛生局は、のちの産業革命時の衛生警察と同様に、政治警察部局によって構成されていた。このことは、「疫病の際の公衆衛生対策が、強力な権限を有する行政部局によってしか実行されえないことを、政府がよく認識していたという証拠なのである。」⁽¹⁴⁾ このイタリアにおける動向は、ヨーロッパ内で、最も進んだ対策であったと言える⁽¹⁵⁾が、一方では、イタリアが黒死病に再三襲われたことを意味している。衛生環境の課題が医学と無媒介で解決されることはないにしても、衛生に関する取り組みは、様々な強制力をもつ規制を必要としたために、すぐれて行政的な課題であった。したがって衛生担当官は、任命されれば辞退することのできない治安職でもあったのである。「衛生局の実権は、当初から医師たちにではなく、行政官の手に委ねられ、…内科医も外科医も衛生局の雇員にすぎなかった。」⁽¹⁶⁾ これは行政官達が医学を知っていたからではないし、医師が黒死病に無関心であったからでもない。衛生担当官は、医師と頻繁に情報の交換を行い、また医師からの助言を得ていたと思われるが、その本質的な仕事は治療に関する予防医学的な内容ではなかった。商品（肉や魚、ワイン、衣服）の検疫、感染者の隔離に関する権限、黒死病の伝播者とみなされた不浮浪者や娼婦の移動の監視、さらに死亡者の表の作成など、様々な規則や監督という行政の手続きによって、黒死病の社会的な拡大を防御するのが役割であった。すなわち、公衆衛生学の萌芽とその発展は、黒死病という社会的危機に直面した「イタリアルネサンス社会の行政能力の産物であった」⁽¹⁷⁾ し、

同時にそれは治安を維持し、社会を防衛するための権力の表現でもあったのである。これらは、今日でも急性感染症に公衆が晒されたとき、その緊急措置として、感染者をインフォームド・コンセントなしに隔離することができるという現代でも承認されている危機管理政策の起源になっている。

社会の防衛とは、日々の社会活動を支えるすべての恒常性の防衛や維持を意味する。したがって立場の異なる様々な人々の行き来する社会にあっては、その抵抗もまた激しかった。最高機関にたいしてのみ責任を負えばよいという大きな権限を与えられていた「衛生官は、広範な敵意に囲まれていた。」⁽¹⁸⁾ 民衆は自宅禁足や隔離を嫌い、有力者たちは、黒死病から逃げようとする自らの移動制限に激怒し、魂の救済を求める「牧師、修道士、司教たちは、公開説教と行列詠唱の中止命令に憤った。」⁽¹⁹⁾ とくに1630年の流行時に、後にガリレオを断罪することになるウルバヌス8世は「トスカナ地方の聖職者に扇動されて、フィレンツェの衛生官全員をただちに破門にしてしまった。」⁽²⁰⁾ 利害関係が社会のなかでどのように彩られようとも、その彩りを含めて社会は防衛されるしかなかった。小児科の医師たちが、子供の病気を診る以上に母親の気持ちを斟酌しなければならないように、衛生官たちにとって、黒死病との闘いは、不明の原因に翻弄された格闘であった以上に、人間社会との闘いであった。すなわち、人間と疾病との闘いとは、ウィルヒョウの言葉⁽²¹⁾を繰り返すまでもなく、その原因究明と治療法開発の過程である以上に、疾病によって初めて明かとなる人間社会の文化的構造と機能の不備、およびその限界に対する闘いでもあるのである。

12. ルネサンス期の医学と医師

12世紀におけるアラビア文化の移入の結果、各地に大学が発展していったように、「アラビアの保健制度は、ヨーロッパにとって直接的な模範となった。」⁽¹⁾ 11世紀後半にシチリアを征服したノルマン王朝は、ロジェ（ロゲリウス）2世の時代の1140年に、医師の認可試験の法律を發布した。そのヨーロッパ世界における医業の権力による規制は、1231年のシチリア王国の皇帝であると同時に神聖ローマ帝国皇帝でもあったフリードリヒ二世（1195 - 1250）によって布告された「メルフィーの法典」で再確認され、「国王の臣下が経験の浅い医師のために危害を被ることのないように、公的な試験を受け、サレルノ医学校の教授たちによって認証されるまでは、何びとも医業に就いてはならない」⁽²⁾と定められた。自らが征服したアラビア文化の虜になった逆説の皇帝フリードリヒ二世の治世下では、アラビア文化が浸透し、したがってこの医業規制も931年のバクダードにおける医師の開業証明書の流れを汲むものであると理解される。遅れること2世紀にして、南イタリアはこのアラビアの国家試験と医師の免許制度を援用したといえる。おそらくこれは、宮廷に出入りしていたイスラム高級官僚たちが設計した制度である可能性がある。ただ、立法されたものが常に有効であったとは限らない。本質的な意味で医師の資格を問うのは後の時代である。

医師の数自体が少なかった当時のヨーロッパにおいて、大学出身の医師はさらに少なく⁽³⁾、その多くは王侯貴族の侍医であった。高い診察料や治療費を支払う余裕のない多くの一般に市民や貧しい人々にとって、医師の診察や治療を受ける余裕はなかっただろう。後代においてもヨーロッパの各都市は、困窮者や一般の人びとへの医師による診察や治療を保障するために、公共医⁽⁴⁾というかたちで医師の給与を公的に保障していた。1630年の北イタリアに

において「小都市や村、農村で仕事をしている内科医の約 55 パーセント、外科医の約 39 パーセントが公的に俸給を得ていた。」⁽⁵⁾ そしてこれらの医師は支払い能力のある市民は別としても「貧困者を無料で治療することが合意」⁽⁶⁾ されていたのである。

ここでは様々な治療法や養生訓が、その確かさなどは無関係であるかのように、洪水のように氾濫していた。黒死病が蔓延したとき、腺ペストと肺ペストの異なる病型を認識し、ヨーロッパで最も「優れた」医師と目される教皇の侍医ギ・ド・ショーリアックによる最善の予防法は「逃げて、アロエを主成分とする丸薬を服用し、瀉血し、火によって空気を浄化し、…テリアカ⁽⁷⁾を服用し、果物や芳香を放つ植物を食用し、『アルメニアの大型丸薬で四体液を和らげ、酸味の強いもので腐敗を防ぐ』ことであった。」⁽⁸⁾ そして彼はペスト患者に対し「治療として、瀉血と瀉出をおこない、舐剤^{しざい}を与え、気つけ用シロップを飲ませた。外部潰瘍はパン種とバターを一緒に焼き、すり潰して混ぜたイチジクと玉葱とをつけて膿みきらせ、つぎに切開し、潰瘍にするのと同じように手当てした。」⁽⁹⁾

ガレノスが論じたように、依然として疾病を身体の体液の平衡状態の失調に起因すると考えていた医師たちは、身体的変化を診察し、眼瞼結膜や尿の色調を判断し、体液（血液、粘液、黄色胆汁、黒色胆汁）の平衡失調を瀉血（血を抜き取ること）や瀉下（下痢を誘発すること）によって回復しようと努力した。したがって瀉血や瀉下が盛んに行われた。これらの治療法は、実は 19 世紀まで続けられた方法である。いくつかの作用をもつ薬草として、緩下剤や鎮痛薬、致死薬、墮胎薬や利尿薬などが知られていたが、その効用とは無関係に大量の薬草が使用されていた。体力のなくなった患者からの瀉血は、さらに体力を奪ったに違いない。腫脹したリンパ節の切開が外科医の手で行われているフレスコ画が残っている（サヴォワ聖セバスティアン礼拝堂）ように、理髪師を兼ねた外科医達は、ペストによる鼠蹊部の腫瘍（リンパ節腫脹）を切開し、切り取るということをしにさかに行ったようである。それは外科医をして黒死病罹患への危険性を高めたであろうし、事実、黒死病は医師たちにも多くの犠牲を強いた。行政当局は、黒死病で医師の数が減少するのを見越して、医師達の自由な移動を禁止していた。

結論的に、ヨーロッパにおける黒死病の流行に対して医学は無力だった。未だ解明されず、自然のバールを理解することも、暴くこともできなかった医学に携わる医師自体の数も黒死病の犠牲となった。異なる地域で異なる治療法や薬が処方されたが、人々は医師の選択による治療法の如何に関わらず、何もしていないのと同様に、同じ程度に死に、同じ程度に生きのびていたのである。このように無力な医学と医師にもかかわらず、ヨーロッパはアラビアに遅れること 200 年にして、ようやく「医療を行うためには一定の専門的訓練機関を経て特定の試験に合格しなければならない、という構想をとにもかくにも実施に移した。」⁽¹⁰⁾ 「19 世紀末までは、医師が果たした実際上の最大の貢献は、心理的ニーズを満たしたことであり、…医師は『他のどんなことよりも、彼が患者と家族の前に存在しているという精神的効果によって、多くのことをなした』のである。」⁽¹¹⁾ ヒポクラテスの言葉を借りるならば、患者は「医術に自身を委ね信頼をおいたというまさにそのことによって、医術の実体を観察したのであり、作業の完成によってその効能を知った」⁽¹²⁾ のである。そして「教会の医学に対する束縛を決定的に解いたのは、ルネサンスであった。」⁽¹³⁾

黒死病は、とくにイタリアにおいて膨大な物的資源と費用を消耗させた。黒死病がどのような原因で起こり、何故ひとは死ぬのかという明確な知識を得るまでに、人類はこののち 500

年を要することになる。「彼らは瘴気やガスや体液に関する曖昧な理論に誤導され、人から人への伝染の可能性、および感染源としての商品の役割を過大に評価した。彼らが衛兵の配置や手紙の燻蒸や商品の消毒・焼却に投下したのと同じくらいの金額をネズミ退治に使ったならば、疑いなく多大の成果を上げたであろう。」⁽¹⁴⁾しかし、この時期の医学や医師が、膨大な浪費ともいえる努力に見合う成果を収めることができなかったからといって、彼らを非難すべき何の根拠もない。それは恰も癌との闘いに苦戦している今日のわれわれと近似しているかもしれない。黒死病との闘いにおいて試行した様々な防衛政策、またルネサンスをスプリングボードとして17世紀に開花する科学革命の端緒を形成した点においても、イタリアは近代の西洋にとって極めて重要な役割を果たしたといえるのである。

イタリアルネサンスは多くの政治的亡命者や異端審問を避けるための宗教的亡命者をイタリアから遠ざけることで、ルネサンスをヨーロッパに広げることにつながった。黒死病を呼び寄せた十字軍の経験は、一方でヨーロッパ人に漂白本能をよびさましていたが、「正式に追放された者だけでなく、何千という人間が政治的、あるいは経済的状态そのものがたえられなくなったという理由で、命ぜられもしないのに、生まれた都市を捨てた。」⁽¹⁵⁾これらの知識人は、それまで知識を独占していた僧侶階級とは独立した世俗人であった。都市は、大学の存在や有名人を住まわすことを、あるいはその骨を所有することを名誉と考えたし、「私の故郷は世界である」といったダンテのように、個人もまた積極的に故郷を捨ててコスモポリタンになった。しかし一方で、学生を中心とする集団が、自国では学ぶことができないものを学ぶためにイタリアの大学を目指した。「学生には国境がなかった。…若者たちは…教師の名声にひかれ、あるいは学校の専門科目に魅せられて移っていった。」⁽¹⁶⁾重要なことは、この学生の移動とともに「思想や書物が伝播した」⁽¹⁷⁾という点である。ドイツからのクザーヌス (Nicolaus Cusanus: 1401 - 64) は、ハイデルベルグ大学からパドヴァ大学に進み、近代の科学的思想をその神学に帯び、ポーランドからのコペルニクス (Lucas Copernicus: 1473 - 1543) はボローニャ大学で法学・天文学を学んだあとパドヴァで医学・天文学を学び、フェッラーラ大学で学位を取った。ブリュッセルからのヴェサリウス (Andreas Vesalius: 1514 - 64) は、パリ大学、ルーヴァン大学のちパドヴァ大学に進み、近代解剖学の祖となり、イギリスからはハーヴェイ (William Harvey: 1578 - 1657) がパドヴァ大学に学び、血液循環の理論を確立することになる。

この時代、全ヨーロッパの中でイタリアの大学は特異な位置を占め、知的な指導的役割を果たしていた。「パリではまず予備的な学芸科目に学位を与えて、学生はそれから上級の法学・医学・神学の学部へと進んだのに対し、ボローニャでは学芸科目と医学は同じ学位課程の一部であり、普通『学芸科目および医学の』学位と呼ばれる資格を与えた。」⁽¹⁸⁾学芸科目、すなわち数学、幾何学、天文学、文法学、そして根幹であるアリストテレス哲学は、パリ大学では神学の予備学問であったのに対し、イタリアでは「医学や法学を研究するための準備段階であった。…自然哲学に焦点を絞ったために、イタリアの大学ではトレント公会議の後まで、正式の神学研究がほとんど行われなかった。」⁽¹⁹⁾神学的な縛りの比較的すくなかった北イタリアにおいて、アレクサンドリア時代以降途絶えていた人体解剖が始まった。1302年2月、ボローニャにおいて「アリゾノという者が、毒殺を疑わせる状況下で死亡し、二人の医師と三人の外科医が遺体解剖による検死をして、…犯罪とは関わりのないと結論した。」

⁽²⁰⁾ こののち、ボローニャ大学では、モンディーノ (? - 1326) によって系統的解剖学が行

われるようになり、それはパドヴァ大学、モンペリエ大学へと拡大していった。黒死病の時代に、ときの教皇クレメンスVI世は原因究明のための人体解剖を許可したが、それ以前にボローニャ大学で始まった近代の解剖学は、人間の構造と機能を理解するという最も基本的な作業であった。その知見がすぐさま人々の疾病の治療に役立つことはなかったが、これなくして以後の医学の発展もなかった。にも拘わらず、その後近代解剖学の牽引力となったのは医師やその医学的動機ではなく、むしろルネサンス芸術家たちの科学芸術的な情熱であったのである。レオナルド・ダ・ヴィンチは、1489年から解剖の研究を進め、レオ十世が禁止令を出すまで続けた。彼は「解剖学を妨害し中断させた学生どもに対してぜひとも弾劾論を書くこと」⁽²¹⁾と手記の中で憤慨している。一方ミケランジェロも、キリストの磔け像を描くために、クレモナのコロンボ（医師）から教えを受けた。「近代解剖学の祖」とわれるヴェサリウスが生まれた頃、ダ・ヴィンチはすでに30体以上もの人体を解剖し、無数のデッサンとともにその機能についても考察していた。その手記は、左書きの逆さ文字のために、200年にも亘って理解されることがなかったが、フランシス1世に招かれた最後の土地フランスで、老齢のレオナルドに面会したアラゴン枢機卿の随行員が1517年に記述している。「この紳士は、四肢、筋、神経、血管、靱帯、内臓、その他男女の身体で吟味すべきものは何でも、未だほかに誰もやったことのない仕方で、図示した詳細な解剖をしている。」⁽²²⁾ 専門的な医学者によってもなされていなかった人体を解剖することによって、皮膚の裏に隠されていた人間の構造と機能の意味を考察しようとしていたレオナルドの詳細な素描を、ヴェサリウスが果たして目にしていなかったであろうか？人間の経験とその知的集積回路は、キリスト教の権威に敗れ、知的な創造的活動としては凋落の一途にあった大学とは全く無媒介に、レオナルドのような科学的職人技芸者の精神的営為と結合しながら、その量を質へと止揚しつつ、科学革命への幕開けを準備していた。

黒死病は、死の意味を変え生の情熱を刻印しながらルネサンスを彩り、ヨーロッパの近代を準備した心的外傷トラウマとなった。ボッカッチョによって活写されたフィレンツェの惨状は、好色文学の作者たることを嫌ったボッカッチョの意に反して、デカメロンを歴史的文献に変えた。サボナローラの説いた終末思想に基づくフィレンツェ支配（1492-98）も、黒死病による心的外傷トラウマの後遺症とも言える。フィレンツェ共和国憲法改正を機に、ミケランジェロは市民からダビデ像の彫像（1504）を依頼された。サムエル記（下）が伝えるとことによれば、イスラエルの民の人口調査をした罰として、ダビデは7年間の飢餓、3ヶ月間の戦争あるいは3日間の疫病（ペスト）の三つの厄災のうちの一つを選ばねばならなかった⁽²³⁾。彼は自己の運命が他者に委ねられるのを拒んで疫病を選んだが、14世紀ヨーロッパの黒死病は、3日間どころか、もっとも激しかった1348～1351年以降も、実に3世紀以上にもわたってヨーロッパの各都市や地方を苦しめたのである。ミケランジェロ広場に立つダビデ像は、その選択を詫びるように、今も美しいフィレンツェの街を見下ろしている。

注釈

1. 生態系の中の疫病

- (1) F・ブローデル「日常性の構造1」村上光彦訳,P.103,みすず書房,1985年
- (2) トゥキディデス「歴史」小西晴雄訳,P.71,「世界古典文学全集11」筑摩書房,1971年。
- (3) FF・カートライト「歴史を変えた病」倉俣トーマス旭・小林武夫訳,P.20,りぶらりあ選書,法政大学出版会,1996年。「キリスト教教会の発展は,相続いた疫病の際の特別な医療伝導により鼓舞激励されたのである。」同P.25
- (4) F・ブローデル,ibid, P.24。F・ブローデルは,カリフォルニアバークレー校のアメリカ歴史学者の試算を紹介している。それによると,「メキシコだけでも1519年に…2500万という数字が得られた。その後,この人口は絶えず,しかも急速に減少していくこととなった。1532年,1680万。1548年,630万。1568年265万,1580年,190万。1595年,137万5000,1605年100万。」
- (5) J.リュフィエ・JC.スルーニア「ペストからエイズまで—人間史における疫病」中澤紀雄訳P.192国文社,1988年。
- (6) ハンセン病:かつては「癩(らい)病」と呼ばれ,結核菌に類似した非定型抗酸菌に一種で,致命的病原性は低いが,知覚神経や皮膚を傷害し,顔面,手指の強烈な変形を伴うために恐れられた疾病。各国で強制隔離政策がとられ,患者は社会的な意味で死亡を宣告され,家族は身内から患者が出たことを隠すために,患者の戸籍までを抹消した悲しい歴史がある。我が国では,隔離政策を撤廃しようとのWHOの勧告から遅れること半世紀,1996年ようやく「らい予防法」が廃止され,約1万人ほどのハンセン病患者の社会的隔離政策に終止符が打たれた。
- (7) J.N. Hays「The Burden of the Disease—Epidemics and Human Response of Disease in Western History」P.29, Rutgers University Press, New Brunswick, 1989
- (8) M.リュスネ「ペストのフランス史」宮崎揚弘・工藤則光訳,P.47,同文館,1998年
- (9) M.ミース「ペスト後のイタリア絵画—14世紀中頃のフィレンツェとシエナの芸術・宗教・社会」中森義宗訳,P.281,中央大学出版部,1978年。ただし焼灼は殺菌行為としては有効である。
- (10) CM.チボラ「ペストと都市国家—ルネサンスの公衆衛生と医師」日野秀逸訳,P.99,平凡社,1988。1630年のポローニャでは,すべての飼ひ犬,飼ひ猫,鶏,鳩を殺すようにとの布告が衛生局から出されている。
- (11) 天然痘ウイルス株は,アメリカとロシアの研究所にそれぞれ保管されている。

2. 生存の戦略としての予防

- (1) 細菌 (microbe) という言葉が初めて使用されたのは1877年である
- (2) 瘴気説:汚れた空気に病気の原因があるとする説
- (3) アテネは疫病によってペロポネソス戦役に敗れたが,その疫病を具に観察していたトゥキディデスは人間の「免疫機能」を叙述していた。「この疫病から回復した人々が,死者や患者に最も深い同情を示したのは,…この疫病に再びかかって死ぬ様なことがないからであった。」トゥキディデス,ibid, P.118
- (4) G.ローゼン「公衆衛生の歴史」小栗史朗訳,P.5,第一出版,1947年。ウイルヒョウが,仲間と共に発刊した「医事改革」の一説に書かれた言葉。
- (5) 後天性免疫不全症候群 (HIV),急性呼吸器感染症 (SARS),高病原性鳥インフルエンザ,ウエストナイル脳炎,エボラ出血熱,コンゴ出血熱,バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌,マールブルグ病,ラッサ熱,クリプトスポリジウム症など

3. ヨーロッパ医学の系譜

- (1) CH.ハスキンス「12世紀ルネサンス」別宮貞徳・朝倉文市訳,P.235,みすず書房,1989年
- (2) ibid, P.254
- (3) 伊東俊太郎「12世紀ルネサンス」,P.21,講談社学術文庫,2006年
- (4) D.フラワー「知識の灯台」柴田和雄訳,P.185,柏書房,2003年
- (5) D.フラワー「四世紀後半にこのような被害を受けたのは,アレクサンドリアの図書館だけではない。364年には皇帝ヨヴィアスが短い9ヶ月の短い治世に,アンティオキアの図書館を炎上させ,教会の扇動によってローマでも相当数の私立及び公共の図書館を閉鎖させた。」「知識の灯台」柴田和雄訳,P.213,柏書房,2003年
- (6) C.シンガー「生物学の歴史」西村顯治訳,P.68,時空出版,1999年
- (7) ibid, P.68
- (8) 「公衆衛生と下水設備は西暦300年当時の方が19世紀の中頃になって衛生思想が再興するまでよりずっと進歩していた…。現在のしがいいでは不愉快なくらいに探し出すのが困難な公衆便所は西暦1世紀のローマではどこでも存在した。」(FF・カートライト「歴史を変えた病」倉俣トーマス旭・小林武夫訳,P.9,りぶらりあ選書,法政大学出版局,1996年

- (9) S.フンケ「アラビア文化の遺産」高尾利数訳,P.108,みすず書房,2003年
- (10) 皇帝ユスティニアヌスは527年帝位につき,ギリシャ人は公職に就けないことを定め,529年には「アテナイにおいて何人も伝来の習俗を講義してはならぬ」と命じる布告を発した—世界の名著「プロティノス・ポルピュリオス・プロクロス」田中美知太郎,水地宗明訳,P.60,中央公論社,1976年。このとき,アリストテレスの創ったリュケイオン,ストア派の中心であったストアポイキン,エピクロス派の庭園も全てが閉鎖された。
- (11) 井筒俊彦「イスラーム思想史」P.20,中公文庫,中央公論社,2005年
- (12) フンケ,ibid, P.69
- (13) 井筒俊彦,ibid, P.56
- (14) MR.メノカル「寛容の文化」足立孝訳,P.9,名古屋大学出版会,2005年
- (15) A.ダッラーレ「科学・医学・技術—科学文化の発展」:JL・エスポジト編「イスラームの歴史1新文明の淵源 第4章」坂井定雄,小田切勝子訳,P.212,共同通信社,2005年
- (16) 伊東俊太郎「アラビア科学とイブン・スィーナー」科学の名著8「イブン・スィーナー」,P.10,朝日出版,1981年
- (17) A.ダッラーレ,ibid, P.281
- (18) ibid, P.281
- (19) HR.ターナー「科学で読むイスラム文化」久保儀明訳,P.21,青土社,2001年
- (20) MR.メノカル,ibid, P.26
- (21) 伊東俊太郎「アラビア科学とイブン・スィーナー」科学の名著8「イブン・スィーナー」,P.10,
- (22) 伊東俊太郎は「12世紀ルネサンス」(講談社学術文庫1780)の中で,ギリシャ・ヘレニズム文化のシリア言語化を背景とした「シリア・ヘレニズム」→そのアラビア語化を背景にした「アラビア・ルネサンス」→そのラテン語化を背景とした「12世紀ルネサンス」の構図を記述している。
- (23) MR.メノカル,ibid, P.217
- (24) A.ダッラーレ,ibid, P.218
- (25) ibid, P.216
- (26) 体液病理学とはヒポクラテス(学派)によって考えられた病因論である。

4. イスラム医学

- (1) A.ダッラーレ,ibid, P.275:イスラム世界では病院は単に患者の治療施設というよりは,大きな文化施設であった。カリフのマンサーリーは彼が建てたカイロのマンサーリー病院の中に,孤児たちの教育施設として学校を併設した。
- (2) 寄付行為として喜捨はイスラム教においてはもっとも重要な信仰の体现であった。
- (3) S.フンケ,ibid, P.185
- (4) ibid, P.113
- (5) ibid, P.117
- (6) A.ダッラーレ,ibid, P.268
- (7) 竹下政孝「中世思想原典集成11—イスラーム哲学」総序,P.12,平凡社,2000年
- (8) 五十嵐一「イブン＝スィーナー「医学典範」」P.39,「科学の名著8—イブン・スィーナー」朝日出版,1981年
- (9) イブン＝スィーナー「医学典範」五十嵐一訳,P.15,「科学の名著8—イブン・スィーナー」朝日出版,1981年
- (10) 五十嵐一「科学の名著8—イブン・スィーナー」P.46,朝日出版,1981年
- (11) S.フンケ,ibid, P.118
- (12) ibid, P.118
- (13) A.ダッラーレ,ibid, P.278
- (14) ibid, P.271
- (15) S.フンケ,ibid, P.148
- (16) ibid, P.163
- (17) CH.ハスキンス,P.274
- (18) S.フンケ,ibid, P.108
- (19) J.リチャール「十字軍の精神」宮松浩憲訳,P.26,りぶらりあ選書,法政大学出版会,2004年
- (20) S.フンケ,ibid, P.163
- (21) ibid, P.170
- (22) ibid, P.164

5. 十二世紀ルネサンスとキリスト教

- (1) ER.ラバント「ルネサンスのイタリア」大高順雄訳,P.11,みすず書房。831年パレルモ,843年メッシーナ,859カストロジョ

- バンニ,878年シラクーザ,そして902年にタオルミーナがイスラムの支配下となった。
- (2) CH.ハスキンス,「12世紀ルネサンス」別宮貞徳・朝倉文市訳,P.270,みすず書房,1989年
 - (3) ノルマン王朝:東ローマ帝国,サラセン帝国,地元勢力の対立で混乱していた南イタリアに1130年ヴェイキング末裔のノルマン人傭兵によってノルマン王朝が成立した。フリードリヒ二世は,1224年ナポリに王立大学を創設し,臣下がこの両大学以外の上級学校に進学することを規制するという「勉強拘束」をおこなった。「彼の人物像で私たちが震撼させるのは,骨の髄まで染みこんだ宗教への無関心だ。彼は三つの一神教(ユダヤ教,キリスト教,イスラム教=引用者)のどれも憎まず,相手にしなかった。(E.フリーデル「近代文化史」宮下啓三訳P.112みすず書房,1987年)」。1231年ローマ法典に基づいて南イタリアメルフィで作成した勅法が「メルフィー法典」であり,アラビア人の官僚を擁し,近代国家の期限ともいわれる中央集権的國家の建設を目指した。
 - (4) 高山博「中世シチリア王国」P.87,講談社現代新書,1999年
 - (5) S.フンケ,ibid, P.162
 - (6) ムスリムの軍隊は732年ポアティエの闘いでフランク国宮宰カール・マルテルによって西進を阻まれた。
 - (7) S.フンケ,ibid, P.321
 - (8) MR.メノカル「寛容の文化」足立孝訳,P.31,名古屋大学出版会,2005年
 - (9) アルマゲストとは,ギリシャ語で,「最も偉大な」を意味する「メギステ」に定冠詞の「アル」がついたもので,アラブ人が命名した。初版の題名は「数学的な概念」であったという-D・フラワー「知識の灯台」柴田勝雄訳,P.151,柏書房,2003年
 - (10) S.フンケ,ibid, P.165
 - (11) CH.ハスキンス,ibid, P.240-241
 - (12) 王立のものとしては,1208年のバレンシア大学,1218年のサラマンカ大学,1288年のリスボン大学,そしてシチリア王国でフリードリヒ2世が創設した1224ナポリ大学がある。
 - (13) CH.ハスキンス,ibid, P.304-5
 - (14) S.フンケ,ibid, P.166
 - (15) J.ブルクハルト,「イタリアルネサンスの文化」柴田治三郎訳,P.265,「世界の名著」中央公論社,1966年
 - (16) J.ヴェルジェ「中世の大学」大高順雄訳P.42,みすず書房,1979年。ケンブリッジ大学は1208年,オックスフォード大学生の「退去」から始まった。パドヴァ大学は,ポローニャ大学の教員・学生たちとポローニャ自治政府との争いで,ポローニャ大学の教授と学生がパドヴァに「退去」したことによって1222年に生まれた。
 - (17) 下村寅太郎「下村寅太郎著作集4-ルネサンス研究」P.68,みすず書房
 - (18) P.リシェ「ヨーロッパ成立期の学校教育と教養」岩村清太訳,P.286,知泉書館,2002年
 - (19) CH.ハスキンス,ibid, P.256-7

6. イスラム思想と大学の危機

- (1) 竹下政孝「中世思想原典集成11-イスラーム哲学」総序,P.23,平凡社,2000年ibid,
- (2) 井筒俊彦「イスラーム思想史」P.224,中公文庫,中央公論社,2005年
- (3) MR.メノカル,ibid, P.223
- (4) CH.ハスキンス,ibid, P.287
- (5) 井筒俊彦,ibid, P.361
- (6) MR.メノカル,ibid, P.224
- (7) ibid, P.220
- (8) ibid, P.220
- (9) CB.シュミット・BP.コーペンヘイヴァー「ルネサンス哲学」榎本武文訳,P.8,平凡社,2003年
- (10) 山本耕平「中世思想原典集成14-トマス・アクイナス」,P.10,平凡社
- (11) CH.ハスキンス,ibid, P.288。ここでは,汎神論,マニ教,カタリ派なども異端宣告をされている。司教ピエール・ド・コルベイユが会議を主催し,アリストテレスの自然学所著作およびその注釈を公的にも私的にも講読することを禁じた。
- (12) J・ルゴフ「中世とは何か」池田健二・菅沼潤訳,P104,藤原書店,2005年
- (13) ibid, P.104
- (14) S.フンケ,ibid, P.109
- (15) ibid, P.110
- (16) ibid, P.110
- (17) ibid, P.109
- (18) ibid, P.109
- (19) H.ハスキンス,ibid, P.302
- (20) MR.メノカル,ibid, P.214
- (21) ibid, P.288。この後もアリストテレス自然哲学的著作の研究の禁令は,1231年,1245年,1263年と相次いで再交付された。

- (22) CB.シュミット・BP.コーベンヘイヴァー, *ibid*, P.9
 (23) CH.ハスキングズ, *ibid*, P.288
 (24) 托鉢修道会としては1216年に認可された聖ドミニコ会, 1223年に認可された聖フランチェスコ会, 1256年に成立したアウグスティヌス主修道会, 1247年に確立されたカルメル会などがある。これらの托鉢修道会は, 一切の個人の私有財産を認めず, 当時遺贈によって裕福であった修道院とはことなり, 一切の財産を否定し, 定収入すらも断念する清貧さを信条とした修道会だった。
 (25) J.ヴェルジェ「中世の大学」大高順雄訳, P.103, みすず書房, 1979年
 (26) *ibid*, P.103
 (27) エチエンヌ・タンピエ「1277年の禁令」: 「中世思想原典集成13—盛期スコラ哲学」八木雄二・矢玉俊彦訳, P.645, 平凡社
 (28) G.ヴェルジェ, *ibid*, P.105
 (29) *ibid*, P.105
 (30) カタリ派とは禁欲的, 清貧を心がけたキリスト教の派閥で, 南フランス, 北イタリアに信者が拡大し, 二神論を教義としたために異端と断罪され, アルビジオワ十字軍などによって根絶された人々。異端審問所はこのために設置された。
 (31) K.リーゼンフーバー「中世思想史」別巻, 村井則夫訳, P.231, 平凡社
 (32) *ibid*, P.231
 (33) フンケ, *ibid*, P.364
 (34) *ibid*, P.364
 (35) *ibid*, P.284
 (36) *ibid*, P.1

7. 黒死病の衝撃

- (1) E.フリーデル「近代文化史I」宮下啓三訳, P.70, みすず書房, 1987年
 (2) ペストは, *Yersinia pestis* によって発症する。その菌は1894年エルサンによって発見され, エルシニア菌と命名された。ペスト菌に感染したネズミの血液をノミが人間に媒介するというペスト発症経路の解明は, 1898年シモンドによってなされた。ペスト菌に最も感受性の高いネズミが, クマネズミである。ペストにはリンパ節が腫脹する腺ペストと, 人間から人間の飛沫感染より急速に進展する肺ペストに病型分類されており, 治療を行わない場合の死亡率は前者が50~60%, 後者はほぼ100%である。有効な抗菌薬として, ストレプトマイシン, テトラサイクリン, オキシテトラサイクリン, クロラムフェニコールがある。
 (3) J.リュフィエ・JC.スルーニア「ペストからエイズまで—人間史における疫病」中澤紀雄訳, P.102 国文社, 1988年
 (4) ER.ラバント「ルネサンスのイタリア」大高順雄訳, P.162, みすず書房1998年
 (5) M.ミース「ペスト後のイタリア絵画」中森義宗訳, P.90, 中央大学出版部, 1978年
 (6) ER.ラバント, *ibid*, P.162
 (7) M.ミース, *ibid*, P.93
 (8) FF・カートライト「歴史を変えた病」倉俣トーマス旭・小林玄武夫訳, P.40, りぶらりあ選書, 1996年
 (9) *ibid*, P.41
 (10) ギリシャ・ローマ時代より地中海で使用された大型帆船で, 奴隷や犯罪人・囚人にオールを漕がせた。
 (11) J.リュフィエ・JC.スルーニア, *ibid*, P.103
 (12) *ibid*, P.103
 (13) M.ミース, *ibid*, P.94
 (14) *ibid*, P.280
 (15) J.リュフィエ・JC.スルーニア, *ibid*, P.103
 (16) *ibid*, P.103
 (17) 聖年は1300年より, 100年に一度行われることになっており, このときに巡礼を行えば, 死に際して煉獄を免除され, 天国にいけると考えられた。クレメンスVI世は黒死病のために, 聖年を50年早めた1350年とした。
 (18) 倉持不三也「ペストの文化誌」P.74, 朝日選書, 1995年
 (19) FF・カートライト, *ibid*, P.43
 (20) NF.カンター「黒死病—疫病の社会史」久保儀明・植崎靖人訳, P.56, 青土社, 2002年
 (21) M.リュスネ「ペストのフランス史」宮崎揚弘・工藤則光訳, P.85, 同文館, 1998年

8. ヨーロッパ社会の変動

- (1) NF.カンター「黒死病—疫病の社会史」久保儀明・植崎靖人訳, P.30, 青土社, 2002年

- (2) ibid, P.31
 (3) ペストは、18世紀までヨーロッパでくすぶり続けた。そのうちでも1665年～1666年のロンドンのペストでは毎週死亡者が記録され、7万人近くが死亡した。1720年のマルセイユのペストでは、6ヶ月でおよそ3万人が犠牲になった。ナポレオンの軍隊は、ペストによってエジプトから撤退を余儀なくされた。ナポレオンはその後のモスクワにおいても発疹チフスによって敗北している。
 (4) N・オーラーは「中世の死―生と死の境界から死後の世界まで―」の中で、ヨーロッパ人口の概数を記述している。その数は下表のようである。「中世の死」一條麻美子訳、P.25、叢書ユニベルシタス821、法政大学出版会、2005年

(住民数：単位＝万人)

	300年	600年	1000年	1340年	1440年
イベリア半島	400	360	700	900	700
フランス	500	300	600	1,900	1,200
イタリア	400	240	500	930	750
イギリス	30	80	170	500	300
ドイツ帝国およびスカンジナビア	350	210	400	1,160	750
計	1,680	1,190	2,370	5,390	3,700

- (5) NF.カンター「黒死病―疫病の社会史」P.78
 (6) ibid, P.69
 (7) ibid, P.85
 (8) NF.カンター, ibid, P.139
 (9) ibid, P.99
 (10) ibid, P.30
 (11) F.ブローデル「日常性の構造 1」村上光彦訳, P.99, みすず書房, 1985年
 (12) J.リュフィエ・JC.スルーニア, ibid, P.110
 (13) F.ブローデル, ibid, P.101
 (14) CM.チボラ「ペストと都市国家―ルネサンスの公衆衛生と医師」日野秀逸訳, P.98, 作者不詳の年代記からの引用
 (15) ボッカチオ「デカメロン」柏熊達生訳, P.12, 世界文学全集II-1, 河出書房新社, 1963年
 (16) FF・カートライト「歴史を変えた病」倉俣トーマス旭・小林玄武夫訳, P.47, りぶらりあ選書, 1996年
 (17) ER・ラバント「ルネサンスのイタリア」大高順雄訳, P.215, みすず書房, 1998年。
 (18) エチエンヌ・マルセルは、フランス国王の行政に不満をもつブルジョアを代表していたと見られている。
 (19) M・モラ, Ph・ヴォルフ「ヨーロッパにおける中世末期の民衆運動」瀬原義生訳, P.132, MINERVA西洋史ライブラリー16, ミネルヴァ書房, 1996年
 (20) ibid, P.135
 (21) チオンピとは羊毛工業における最下層の梳毛工
 (22) F.ブローデル「日常性の構造 2」村上光彦訳, P.258, みすず書房, 1985年。
 (23) FF・カートライト, ibid, P.51

9. ルネサンスの奈落

- (1) E.フリーデル「近代文化史I」宮下啓三訳, P.69, みすず書房, 1987年
 (2) ibid, P.65
 (3) J・ル＝ゴフ「中世とは何か」池田健二・菅沼潤訳, P92, 藤原書店, 2005年
 (4) E.フリーデル, ibid, P.66
 (5) ibid, P.69
 (6) J.ブルクハルト「イタリアルネサンスの文化」柴田治三郎訳, P.194, 「世界の名著」中央公論社, 1966年
 (7) E.フリーデル「近代文化史I」宮下啓三訳, P.75
 (8) J.ヴェルジェ「中世の大学」大高順雄訳, P.138, みすず書房, 1979年
 (9) P.ギアリ「死者といきる中世―ヨーロッパ封建社会における死生観の変遷」杉崎泰一郎訳, P.8, 白水社, 1999年
 (10) ibid, P.90
 (11) F.アリエス「死の歴史―西洋中世から現代へ」伊藤晃, 成瀬駒男訳, P.24, みすず書房, 1983年
 (12) ibid, P.21-22
 (13) P.ギアリ, ibid, P.46
 (14) ibid, P.48
 (15) F.アリエス, ibid, P.44

- (16) *ibid*, P.85
 (17) 樺山紘一「ルネサンス」講談社学術文庫,P15,講談社,1993年
 (18) メメント・モリ(Memento mori)「死を忘れるな」という古来からのことば(ラテン語)。
 (19) J.ホイジンガ「中世の秋」堀米庸三訳,P268,「世界の名著」中央公論社,1967年
 (20) *ibid*, P.272
 (21) *ibid*, P.274
 (22) *ibid*, P.273
 (23) *ibid*, P.273
 (24) *ibid*, P.282
 (25) ホイジンガは「中世の秋」でマカーブルを次のように説明している。「マカーブル,いやももとのかたちではマカブレというふしぎな言葉が現れたのは14世紀のことであった。『わたしは,マカブレのダンスをした』,ジャン・ルフェーブルは,1376年にこう書いている。…要するにこれは一個の固有名詞なのだ。はじめに,ラ・ダンス・マカーブル『死の舞踏』といういいまわしがあり,のちになってマカーブルという形容詞が分離して,微妙なニュアンスの意味をもつことばになったのである。そのニュアンスは,たいへん鋭く,独特のものであって,私たちは,この言葉を使って,後期中世の死のヴィジョンをあますところなく表現することができるほどなのだ」*ibid*, P.278。「死神はいつも踊り手として,死んでいくことはそれに合わせて死の舞踏と表現された。」N.オーラー「中世の死」一條麻美子訳,P.2316,叢書ユニベルシタス,法政大学出版局,2005年
 (26) F.アリエス「死の歴史—西欧中世から現代へ」伊藤晃,成瀬駒男訳,P.131,みすず書房,1983年
 (27) *ibid*, P.210
 (28) J.ル・ゴフ「中世とは何か」池田健二菅沼潤訳,P.280,藤原書店,2005年
 (29) *ibid*, P.280
 (30) J.リュフィエ・JC.スルーニア「ペストからエイズまで—人間史における疫病」中澤紀雄訳P.115国文社,1988年。アヴィニオンで生き抜いた教皇の侍医ギ・ド・ショリアックの報告
 (31) 「ボヘミアの農夫」はボヘミアのヨハネス・フォン・テューブル(1350?—1414?)によって書かれた。中世後期独逸文学の記念碑的作品とされる。妻を奪った死神を痛烈に批判しながら,なお「妻はこころに生きる」として,死神の限界を説き,人間の自意識と尊厳性を擁護する。N.オーラー「中世の死」一條麻美子訳,P.319—324,叢書ユニベルシタス,法政大学出版局,2005年

10. ルネサンスの双生児—私性と個性—

- (1) J.リュフィエ・JC.スルーニア「ペストからエイズまで—人間史における疫病」中澤紀雄訳P.115国文社,1988年。
 (2) *ibid*, P.115
 (3) FF・カートライト「歴史を変えた病」倉俣トーマス旭・小林玄武夫訳,P.54,りぶらりあ選書,1996年
 (4) D.シュヴァニツ「ヨーロッパ精神の源流—その栄光と挫折と教訓の探求」小杉尅次訳,P.118,世界思想社,2006年
 (5) *ibid*, P.118
 (6) *ibid*, P.119
 (7) N.オーラー「中世の死」一條麻美子訳,P.303,叢書ユニベルシタス,法政大学出版局,2005年
 (8) E.フリーデル「近代文化史I」宮下啓三訳,P.73
 (9) N.オーラー,*ibid*, P.302
 (10) NF.カンター「黒死病—疫病の社会史」P.180
 (11) J.ブルクハルト「イタリアルネサンスの文化」柴田治三郎訳,P.195,「世界の名著」中央公論社,1966年
 (12) CB.シュミット・BP.コーベンヘイヴァー「ルネサンス哲学」榎本武文訳,P.45,平凡社,2003年
 (13) E.トレルチ「宗教改革とルネサンス」内田芳明訳,P.25,岩波文庫,1967年
 (14) J.ブルクハルト,*ibid*, P.396
 (15) ジョバンニ・ピーコ・デラ・ミランダはコシモ・ド・メディチが創ったフィレンツェのプラトン・アカデミアの指導的立場にあったとされる。哲学的立場からフランスに逃亡することを余儀なくされ,フランス国王シャルル8世によって釈放されフィレンツェにもどるも,1494.11.17,シャルルがピエロ・メディチを追放してフィレンツェに入った日に31歳で死んでいる。毒殺されたとの疑いがある。
 (16) ブルクハルト,*ibid*,P.396。他にも訳書はあるが,日本語としてこの一節を引用した。

11. 黒死病の病因論と公衆衛生

- (1) ベッキーン:貧民階級の死体運び人のことで,お金をもらってこのような仕事を引き受けていた。
 (2) ポッカチョ「デカメロン」柏熊達生訳,P.12,世界文学全集II—1,河出書房新社,1963年
 (3) M.リュスネ「ペストのフランス史」宮崎揚弘,工藤則光訳,同文館,P.11,1998

- (4) AC.クロムビー「中世から近代への科学史」上巻,渡辺正雄,青木靖三訳,P.230,コロナ社,1962年
- (5) M.リュスネ,ibid, P.42,1998
- (6) S.フンケ,ibid, P.143.
- (7) (偽)ニコラウス,「中世思想原典集成16ードイツ神秘思想」高寛八訳,P.930,平凡社,2001年。ここで著者(偽)の意味は,ニコラウス作との伝承であるが本人の著作ではなく匿名の人物のものであることを意味する。
- (8) M.リュスネ「ペストのフランス史」宮崎揚弘,工藤則光訳,同文館,P90,1998
- (9) S.フンケibid, P.144
- (10) ガレノスの中心的な考えかたである体液理論は,疾病を人体の体液の平衡状態からの逸脱ないし失調と考えるものである。人体は,血液,粘液,黄色胆汁,黒色胆汁からなり,疾病はこの体液の不均衡によって発生すると考えられていた。
- (11) S.フンケ,ibid, P.145
- (12) AC.クロムビー,ibid, P.231
- (13) CM.チボラ「ペストと都市国家ールネサンスの公衆衛生と医師」日野秀逸訳,P.24ー30
- (14) ibid, P.28
- (15) フランスにおいては1580年になってようやくリヨンに衛生局が設けられた。イギリスでのペスト条例は1543年である。
- (16) CM.チボラ,ibid, P.37ー8
- (17) ibid, P.37
- (18) ibid, P.58
- (19) ibid, P.58
- (20) ibid, P.60
- (21) 第一節参照,注(13)

12. ルネサンス期の医学と医師

- (1) S.フンケ「アラビア文化の遺産」高尾利数訳,P.185,みすず書房,1982年
- (2) C.M.チボラ「ペストと都市国家ールネサンスの公衆衛生と医師」日野秀逸訳,P.180,平凡社自然叢書6,平凡社,1988年
- (3) 一例として,ヴェルジェによるとアヴィニオン大学においては「1430年から1478年にかけて法学部には3,418人が登録したが,神学部には271人,三学四科学部は61人,医学部には13人が登録しただけである。」(中世の大学P.141)
- (4) 公共医のほか,契約医も存在し,監獄や要塞などの公的機関,病院,貴族の家庭や宗教団体と恒常的な契約を結んでいた。
- (5) C.M.チボラ,ibid, P.142
- (6) ibid, P.150
- (7) アテリカ:阿片を含む混合の祇剤で解毒の万能薬と考えられていた。
- (8) M.リュスネ「ペストのフランス史」宮崎揚弘・工藤則光訳P.40,同文館,1988年
- (9) ibid, P.43
- (10) C.M.チボラ, ibid, P.177
- (11) ibid, P.178
- (12) ヒポクラテス「古い医術について」小川政恭訳,岩波文庫,P.88,1963年
- (13) FF・カートライト「歴史を変えた病」倉俣トーマス旭・小林玄武夫訳,P.59,りぶらりあ選書,1996年
- (14) C.M.チボラ, ibid, P.99
- (15) J.ブルクハルト,ibid, P197ー8
- (16) P.リシェ「ヨーロッパ成立期の学校教育と教養」岩村清太訳,P.208,知泉書館,2002年
- (17) J.ヴェルジェ「中世の大学」大高順雄訳,P.73,みすず書房,1979年
- (18) CB.シュミット・BP.コーベンヘイヴァー「ルネサンス哲学」P.12,平凡社,2003年
- (19) ibid, P.12
- (20) CD.オマリー「ブリュッセルのアンドレアス・ヴェサリウス」坂井建雄訳,P38,2001年年
- (21) 下村寅太郎「レオナルド研究」下村寅太郎著作集5,P.401,みすず書房,1992年,随行員はアントニア・デベアス。
- (22) 聖書「サムエル記(下)」